

ボムヘイのイムボ

ボムヘイの秘密

三百三十二

うし、夕殿登飛んで思悄然、孤燈挑げ盡して未だ眼を成さずといふ者もあつたらう。夫が何事ぞ、ベスピアスの山一たびばつと火を噴き出せば、戀もラヴも痴話喧嘩も、焼餅も、皆一切平等地の底に埋まつて仕舞つたのである。馬鹿臭いなごいふ段ぢやない。

風俗の亂れてゐたボムヘイの町々には、今も尙「男の方許りお出下さい」と案内せらるゝものが大分ある。薄暗い寢室の壁に、如何はしい姿の男女を畫いたのもあれば、荒神棚と言つた様な所に、不埒千萬な物を秤に掛けてゐる圖を取藏めたのもある。餘りに甚しい物は盡く取

り外して、ナボリの博物館の秘密室へ收容したさうだが、此の又ナボリの博物館の秘密室なるものは、夫こそ感なるものだ。——話頭が一寸ナボリに歸る。

室が狭いので、十四五人位宛に分けて、入つて呉れといふ。入れば、番人が確かと錠を下して仕舞ふ。成程、室は二十坪にも足らぬ狭いものだが、其の中には、壁といはず、棚と言はず、一面に畫や彫刻や其の外珍無類の品々を陳べてある。僕は許されて、中に入つては見たものゝ、馬鹿臭くて見て居られぬ。所へ、案内の伊太利人が来て、莞爾と笑ひながら、一々之に説明を加へる。パコス神が何やらした話などは、僕等が昔學校で、希臘の神代史の講義を聴いた時、之ばかりほど、教授が差控へた所迄、遠慮なく切り込んで説明して呉れた。之だけならまだしもだが、いざ出やうとする時、此處は一組十分位で入れ代つて、順次に五十人に見せることとなつて居るが、動もすると先客が出後れがらになつて困るから、監督の爲め、僕と尾上新兵衛君とには、最後まで居残つて呉れと、案内者からの頼みだ。仕方がないから、此處に残つて居ると、入れ代り立ち代り、積いて入つて来る連中

ボムヘイの秘密

三百三十三

ボムベイの浴場
は、何れを見ても皆變な笑を頬に浮べて、これも此れも馬鹿みたいな顔して出て御座る。
白眼看他し來れば、世上の事は皆斯んなものであらうか。
ボムベイの見物中、一行五十餘人の中に、兎もすれば、先へ行き過ぎる者、後れがちの者が出來て、打揃ひ兼ねる時は、案内の男打笑ひながら、冗談に「例のどうか男の方だけ」を呼ばくる。すると皆ぞろぞろと尾いて來る。

十二、ボムベイの浴場

スタビヤ通を二三町も歩いて行く、何だか、四五日前に焼けた火事場の跡へでも來た様な氣になつて、一向千年も二千年も前に埋まつた市街の跡とは思はれぬ。發掘せられたるボムベイなど聞いた許では、鶴見のお穴様か何かの様に、松明でも振かざして、辛と身を容れる位の穴の口から、地の底へ潜り込んで、見物するものかと思ふだらうが、何しろ人口二萬の一市をつくり其の儘掘り出したのだから、スタビヤ門を入つた當時こそ、だら

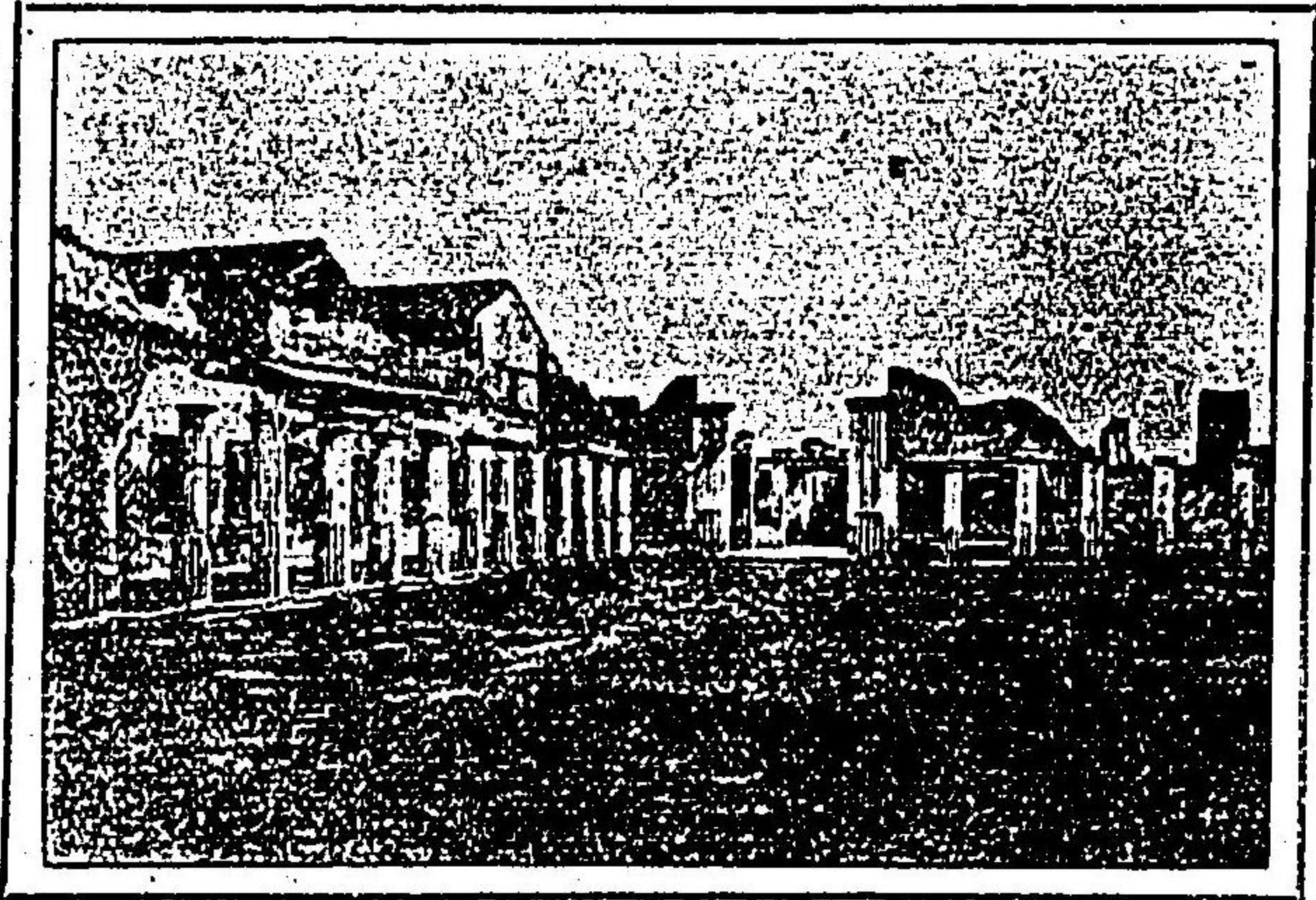
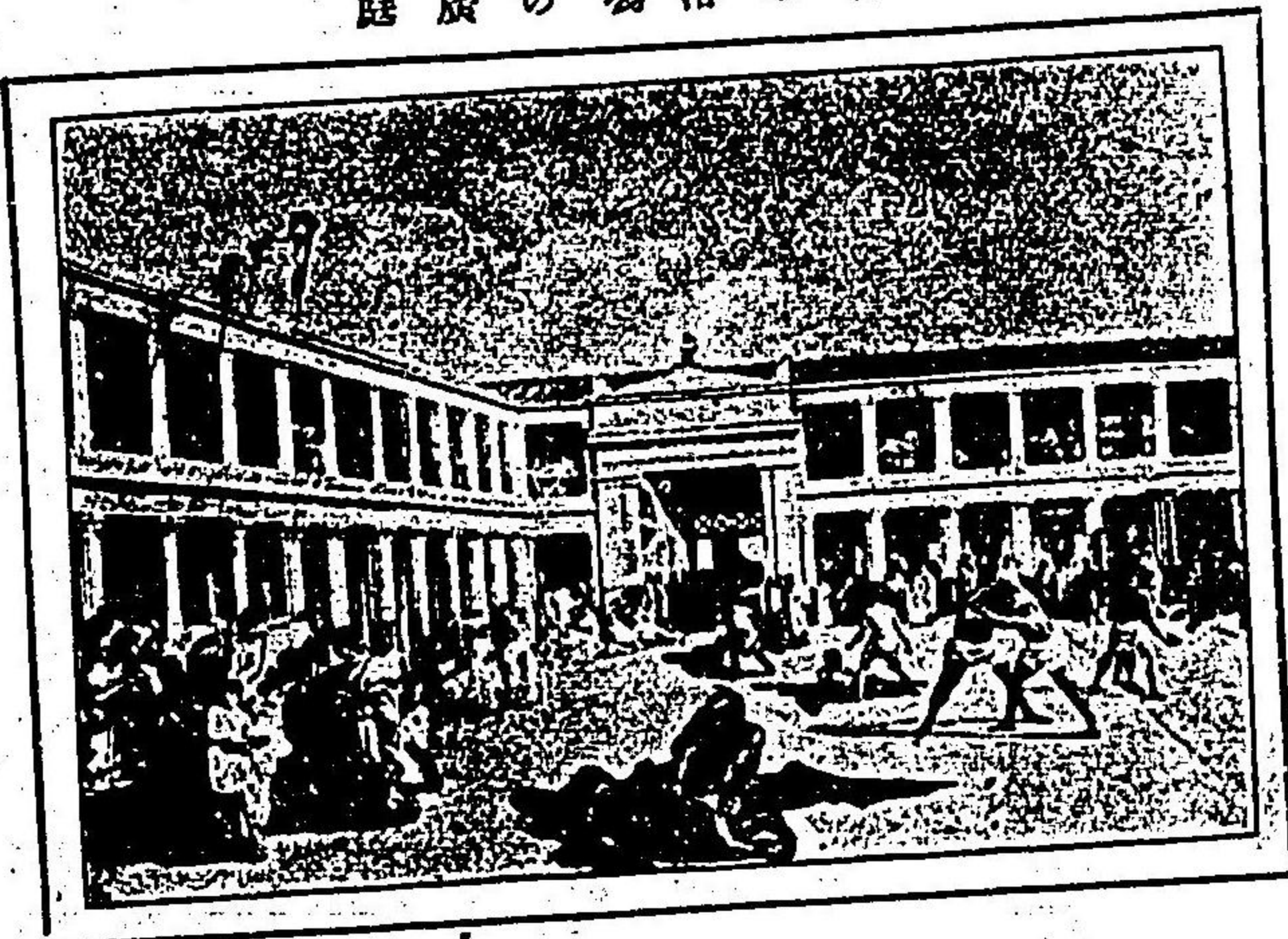
だら少し坂を下りて行く心地はしたれ、今は普通一通の大地を歩くに異ならぬ。夫に、家といふ家は、盡く天井が抜けて、町といふ町は、犬の子一つ見えぬがらんとした物で、發掘などいふ陰氣な文字を使ふより、筆を浮き彫に掘り出したといふ方が宜い位。唯處々家の上に掘り残したまゝ、積上げてある土の高さに依つて、成程、我々は平地より二三間方低い所を歩いてゐるのだと、合點が行くのである。

此のスタビヤ通に、有名な共同浴場がある。ボムベイには、外にまだ二つ大きなのがあ
るが、此處のが一番大きい。羅馬人の浴みを好んだことは、前既に之を説いたが、ボムベ
イの民も、亦南伊太利の御多分に漏れぬ風呂好であつた。風呂好と言つても、江戸子式に
廻り朝湯を浴びて、其の儘ふいと出て行く様な淡泊したものでない。のらりくらり、入つ
ては物を食ひ、又入つては角力を取り、又入つては歌を唱ひ、兎角して日がな一日此處で
遊び暮すのが多かつた。

先づ半ば毀れた此の浴場の入口を入ると、直ぐ片側に、五六の圓柱の残つた長方形の廣

ホムベいの浴場
庭に出る。昔はすつと圓柱を立て廻らして、之を浴客の運動場に宛て居たとかで、此處で角かも取れば、球も投げ、さては、力持もして遊んだのだといふ。其の頃四方の壁には、興行物、展覽會、賣物、買物の繪看板が一面に貼つてあつて、運動に疲れた者は、此等を見廻しながら、つい其處に集つた人々と、世間話に打興したと、今の湯屋と餘り異ならなかつた。此の廣庭の左右には、數々の浴室が立ち列んで、左は婦人用、右は男子用としてあつたさうだが、夫が今も尙、依然として昔の儘に存して居る。最初に先づ脱衣場に入る。ちよぼりんと小

昔の湯場の庭



ホムベいの浴場

浴場の庭の跡

な天窓が一つある。切で極めて薄暗い。昔は天井四壁皆光彩燦爛たる鏡畫で飾られてたといふ。昔のホムベいののら息子共は、此處で衣を脱いで、薄い浴衣に着かへて、隣室の冷水浴に入る。其の次に温氣浴の室がある。暑くなく、寒くなく、丁度宜加減に空気を暖めた所だ。此處はのらくら者が遊ぶに最も都合の宜かつた所だに、室内の繪畫彫刻其の美を盡し、一面に濃いた香水の得ならぬ香は、人の心を時めかせたさある。此處ではうとうと何をするでもなく寝轉んで居る者もあれば、又わちやくと下らぬ談話に時を移す者もあつた。之でさんざ暇を

ボムメイの浴場
 潰して後、扱今度は蒸氣浴に入つて、且汗を取り
 且つ奴隷に垢を流させる段となる。奴隷といふと、
 直ぐアフリカの黒奴のやうに、黒い汚ない奴を聯
 想するが、羅馬時代の奴隷には、各國から捕虜にし
 て來た王侯の子孫があつて、中には絶世の美人も、
 水の滴るやうな美少年も少くなかつたのである。
 蒸氣浴がすんで、今度は又香水の香めでたき温
 水浴に入り、夫から後、如露に打たるゝもあれ
 ば、又冷水浴に歸るもあり、中には更に温氣浴に
 入つて、又のべたらと時を送るものもある。——此
 等が一順ずつと済んで、身も心もやゝ疲れを覺え
 た頃、例の美しい奴隷が出て來て、奇麗に身體を

昔の人婦の冷水浴場



ボムメイの浴場

婦人冷水浴場の跡

拭いた後、珠玉を飾つた金銀の瓶から、花やかな
 香のする油を身體一面に塗つてくれる。其の間當
 の主人は、ぐつたりと寢臺に倚つて、奴隷にから
 かひ、友達と語つたものだ。今ならば、煙草の煙
 ゆたかに、茶を啜り、新聞を讀む所だらうが、幸に
 して、其の頃には、煙草も茶も新聞紙もなかつた。
 斯くて其の頃の浴場は、丁度今日の俱樂部か珈
 琲店同様で、毎日人の寄る頃になると、其の賑ひ
 は非常であつた。有名なセネカの書いたものゝ中
 に斯うある、シマウの書いたものゝ中に斯うあ
 る。曰く、自分は浴場の近所に住んでゐる。凡そ
 世の中にありとあらゆる種々雑多の音が、八方に

ポムペイの浴場

聞えて耳に障る。幾人かの侃強な男が力持を始める。懸命に力を入れる毎に、ううんと唸り、首尾よく力持がすめば、吐息と共に口笛を吹くのが聞える。ぐたりとして、香油を身体に塗らせて居るものがある。ばた／＼と肩を打つ音が聞えて、之が握拳で打つ時と、平手で打つ時と、音が異ふ。突如として喧嘩が始まる。泥坊が捕まる。さては湯の中で朗々と聲自慢に歌ふ者がある。さうかと思ふと、今度はさんぶりご大湯の中に飛び込む音が聞える。此等はまた宜いが、堪らぬのは毛拔屋の聲だ。之が黄色な甲走つた聲で客を呼ぶ。やつと、お客を見つけて、其の聲が鎮まると、今度は之に腋の下の毛を抜せて居た客が、痛がつて大聲を出す。此の騒ぎの中で麵麩腸詰砂糖菓子其の外様々の賣聲が、こちや／＼になつて聞える。

三百四十

嗚呼ポムペイ潰えて千八百年。さしも騒がしかつた浴場も、人影全く失せて、寂然たる廣庭に、晝顔の花が二輪三輪おぼつかなげに咲いた許り。——遠くで案内者の聲が聞える。「男の方許り入しつて下さい。」それ又始まつた。

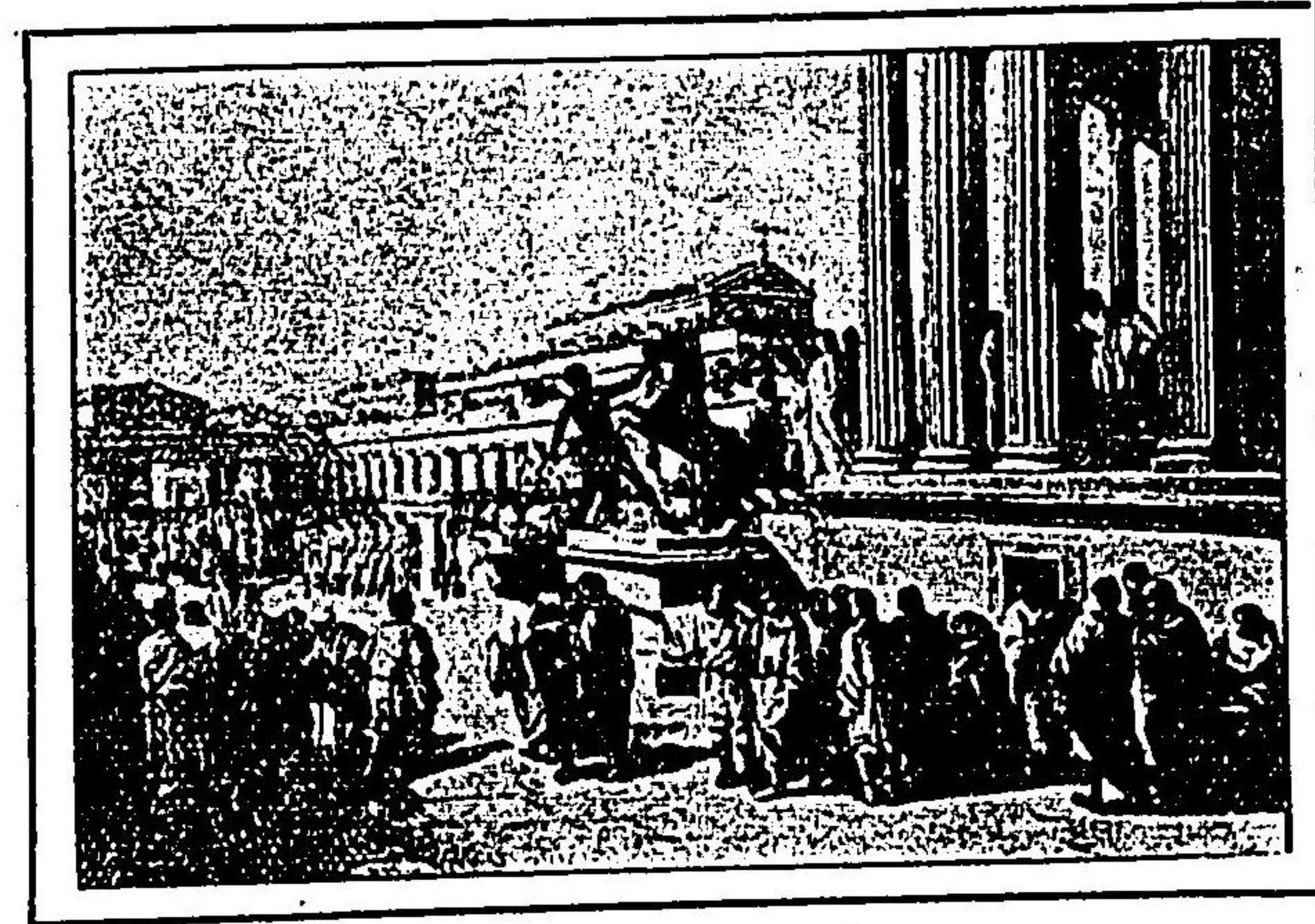
十三、ポムペイのフォーラム

何やら、雨が降りさうになつて来た。ちと急がう。

スタビア通を真直に北に進んで、左に曲り、右に曲り、又右に曲つて、元のスタビア通からノラ通の四つ角に出で、夫から又東西南北に大路小路を廻つて後、更に踵を南に旋して、ポムペイ市の西南隅に在るフォーラムに出た。此處へ出る迄には、寺も見る、湯屋も見る、卑猥極まるベチ兄弟が家の寢室も見れば、壯麗無比と稱ふるベンザが邸も見た。銀細工師の店、水菓子屋、雜貨商、彫像師の家、柔革の工場跡などいふのを見た。外科醫の家がある。此處から様々の外科道具が出たので、斯く名けたといふ。麵麩屋の跡といふが有る。之を掘出した時、麵麩種の堅くなつたのや、麵麩の焼残が出て来たといふ。そんなものが二千年近くも土の中に存つてゐたか何だか、怪しいものだが、案内者もさういへば、書物にもさう書いてある。此等の外に紺屋がある、酒屋がある。染物に使つた藍壺も残つ

ポムペイのフォーラム

三百四十一



ポムメイのフワラム

昔のムララフ

三百四十二

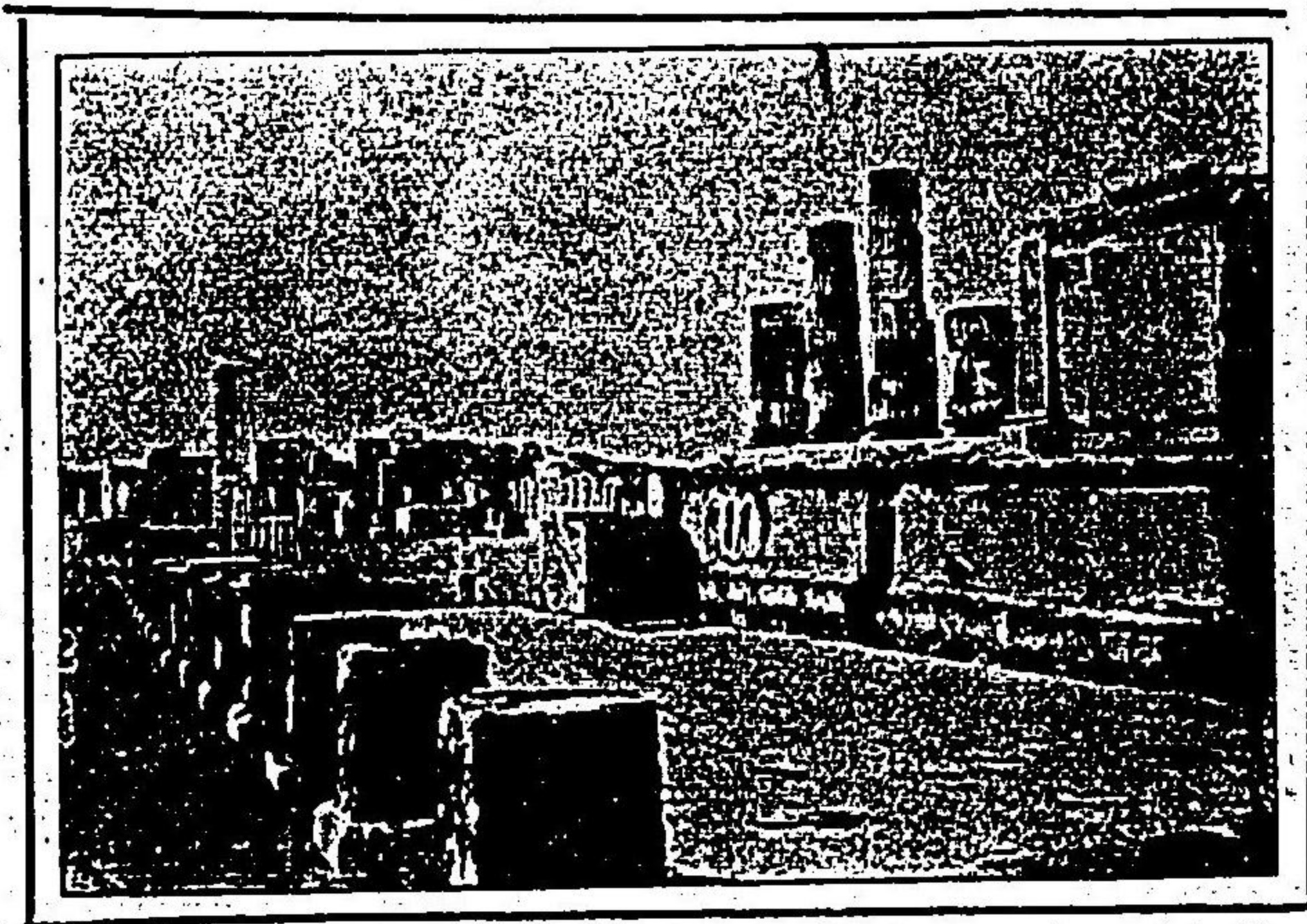
て居れば、葡萄酒を充てたらうと見える、大なる苑がごろ／＼してゐる。勝手次第に名をつけた高利貸の家といふのも見れば、厭世詩人が宅といふのも見た。空事とは知りながらも、リットンの中に出て来る、彼の男らしいサラストが邸といふのを見た時は、彼が手兵二十騎を率ゐて、アルバチエスが家に討入り、目盲ひた可憐の少女ニデアを救ひ出して後、更に演武場に駆付けて、あはや今將に獅子の毒牙にかゝらんとせるグラウカスの命を、危機一髪の間に取りこめた時の光景が、髮髭として目に浮かぶ。

フワラムは長さ五百尺幅百二十三尺の廣庭

で、太やかな圓柱の毀れたのが、四方に大分残つて居る。正面にはジョープの殿堂、西側にはアポロの殿堂が、之も毀れた儘昔なつかしげに立つて居る。此の邊はポムベイ殷賑の中樞であつたといふ丈に、敷石の様、柱の具合、家の結構、如何さま低いポムベイの民家にふさはじからぬ立派な物だ。昔は全部圓柱に取り圍まれて、柱の外には屋根のついた廊下の様なものが有つたさうだが、此等は地震に崩れ、噴火に埋められて、今は見る影もなく荒れ果てゐる。柱も元は大理石で有つたのを、地震の後煉瓦で根継ぎして、其の上を白く塗つた跡がある。

ポムメイのフワラム

跡のムララフ



三百四十三

ボムベいのフラーラム

三百四十四

フラーラムは其の初市場で有つた。朝から晩迄、様々の商人が出つ入りつ、引切なく往來して、此處に露店を張るも、立賣をするもあつた。其の賑はりに誘はれて、此處は又市民が此の上もなき遊樂散步の場ともなつてゐた。ふらりと閑人がぶらつきに出る、儲け口もがなと鶉の目態の目で寄つて来る者もある、青春の血燃ゆるが如き若い男女が、マウの所謂「ローマンチック、アドベンチニア」こやらんにやつて来たのもあつた。

時として、此處でお祭の熱り行はれたことがある。又時として、劍奴の眞劍勝負を此處で興行したこともある。市長其の他公職の選舉運動此處に行はれ、公けの告示法令は此處に貼り出され、又大事に關する演説講演の類も此處で演ぜられた。カルタゴの名將ハニバルが羅馬に討ち入つて、上下震駭して色を失つた頃、羅馬の國民黨に屬する貴族の面々が、慷慨激越の大演説を試みて、遂にボムベイ市民を先頭に、南伊太利の人心を統一して、羅馬に忠誠を表せしめたのは外でもない、此のフラーラムの正面にある、ジョーブの殿堂の入り口

の階段であつたのだ。——如露亦如電の世の中、打つ人も打たる人も、皆くだけて元の土くれとなつて仕舞つたのである。

「男の方だけ来て下さい！」雨が降りさうだからとて、又斯なことをいやがる。

十四、ボムベいの選舉運動

フラーラムを中心にして、北にジョーブの殿堂、西にアポロの殿堂のあることは、前に説いたが、其の外、東隣には、ユーマキア館とて、ユーマキアといふ尼僧の建てたといふ大きな家がある。何でも獸毛商の集會所だつたらうこのことだ。又アポロ殿堂の南には、バジリカとて、之も市場と法廷とに使つたといふ廣庭がある。今でこそ廣庭だが、元は立派な建築があつたのだ。其の少し東に丁度フラーラムの眞南に當つて、トリビュナリと唱ふる大官衙の跡がある。ボムベイの市役所、市會議場、又時として裁判所にも用ひたのださうな。斯様に重要な公私僧俗の建築が、此の一箇所にござやくと凝つてゐたから、自

ボムベいの選舉運動

三百四十五

ボムベいの選挙運動

三百四十六

此處がボムベいの商業上政治上宗教上の中心となつて、倫敦なら、先づウエストミンスターとシチーとを合せた様なものに成つてゐたのである。

されば、公職の選挙などいふ時に當つて、此の邊の賑は非常にあつたに相違ない。ボムベイでは羅馬の共和主義が何處迄もついで廻つて、市吏員法官の類を大概は一般人民から公選したので、其の任期の改まる毎に、選挙の騒ぎは丁度今日の選挙騒ぎと餘り異らなかつたといふ。英語の「アムピション」の語原、羅甸の「アムピシオ」はもと「歴訪」の義で、自稱候補者が選挙有権者を歴訪して、叩頭懇願した所から起つたのだといふに徴しても、如何に昔も今に異らず、阿呆の多かつたかど知れる！

だらしないトローガを着て、例の釣臺に揺れながら、山科歸りの由良之助宜しくといふ見えで、選挙運動に出掛けた其の頃の様を、今日自動車に乗つて、八方に馳驅し、一選挙にシルクハットの縁が二つも三つも千切れて取れるやうに頭を下げ廻つて、尙且つ足らずとする様だ比へると、ボムベイの昔は餘程悠長なもので有つたに相違ないが、夫にしても、

ボムベいの選挙運動

三百四十七

其の頃新聞の廣告に代へて、選挙運動の廣告に使つた文書の中には、中々奇抜なのがある。と言ふ僕は之を見て来た譯でもなく、見たとて分る譯もないが、マウの言ふ所に依ると、此の種の廣告は、街道に向いた壁の上に、花やかな赤文字でべつとりと書いたものだらうな。其の今日迄存つてゐるのを見ると、「誰某を何々に選挙せよ、彼は善人なり」とか、「何某を選挙せんことを懇願す、彼は能く其職に適したる人なり」とか、「なごいふのが最も普通で、中には、「アイシスの信者一同誰某を推挙す」、「何町の住民舉げて誰某の當選を望む」、「なごもある。宿屋業者一同の推薦とあるものあれば、香料品商一同が將來の利益を期してといふものもある。此等は一般選挙者に宛てた廣告だが、一個人に宛てて、「プロクラスよ、サビナスを行政長官に選挙せよ、卿に取りても利あるべし」と言つたやうなものもある。さうかと思ふと、今度は反對の側から皮肉な奴が出て来て、「こそく泥坊一同誰某の當選を求めむ」、「夜遅く迄酒を飲んでぐたつく者、及唯今睡眠中の者一同誰々候補に賛成す」とかといふものもある。

壁に書いたと言へば、野暮臭い選挙候補よりすつと粹な落書が到る處にあつた。夫れ相合傘の下に名前を列べ書かれて眞赤に成つたことは、随分お互に覺のあることである。所がボムペイには、此の種類の盛なのがあつて、眞赤になる所が、得々として御本人自ら様々のことを書いてゐる。達者に暮してお呉れ、ビクトリアよ、何處に居たごて、時々其の可愛らしい口元で嘘をして頂戴な、とある。嘘は嘘をして居る徴候は、ボムペイでも言つたのださうな。之はマウの説明である。ロミユラは此處にてスタフ#ラスと會ひ申候」とある。ボムペイを根こそぎ研究せずんば已まざるマウは、之に註脚を加へて、此のスタフ#ラスといふは性悪男に相違なし、セシリアス、ジュカンダスの庭の柱にも同じやうなことを書いて、此處では外の女に會つてゐる、と二千年を隔てゝ焼餅をやいてゐる。此等の外に、不憫なもの、舌たるいもの、恐れ入るべきものなど、また様々にあるが、宜加減にして先を急ぐことしよう。

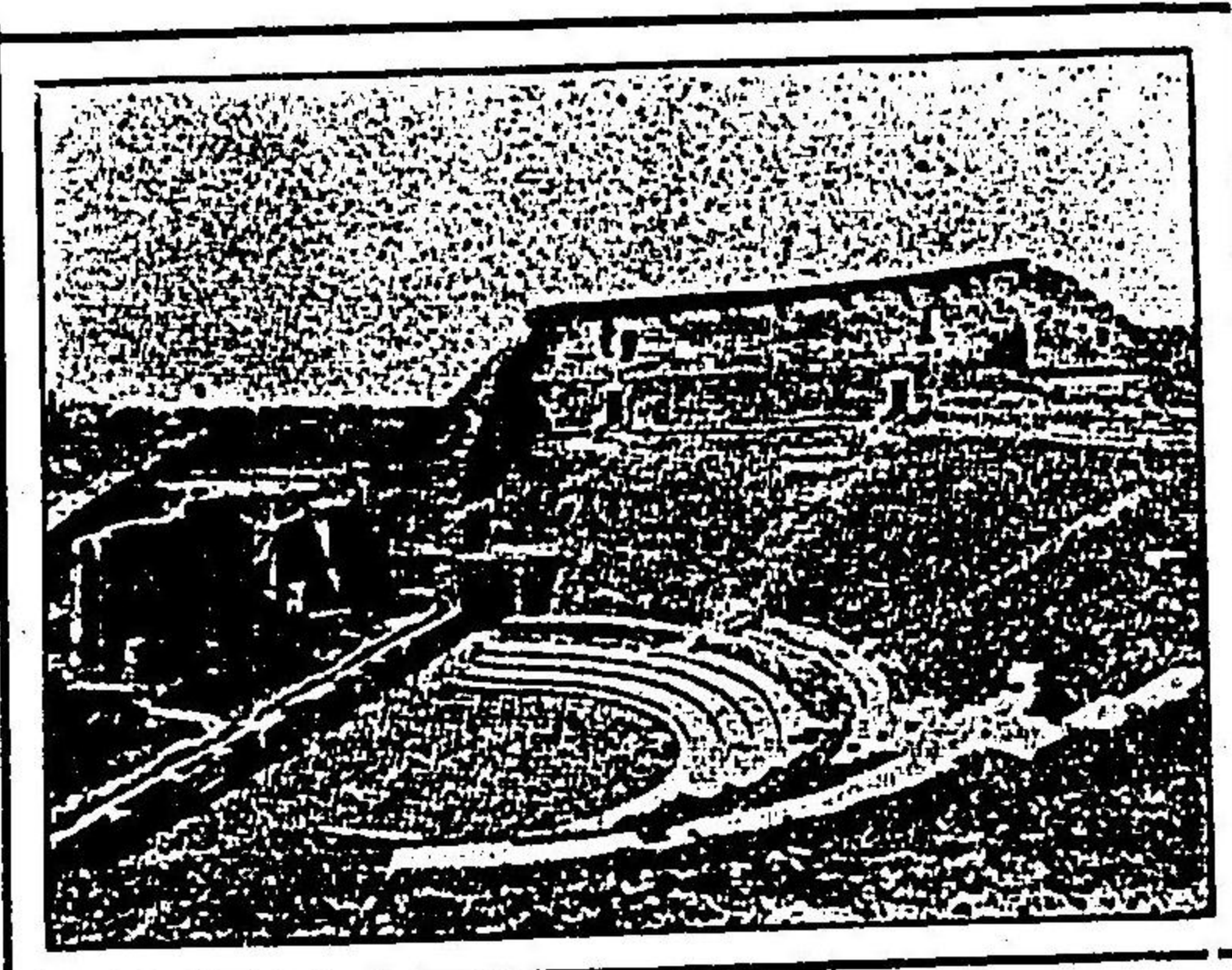
今一度断つておくが、此の項の廣告と樂書との件は、盡くマウが「ボムペイ誌」の請買

であることを、此に明かに白状する。

十五、ボムペイの劇場

廻り回つて、遂に我等はボムペイ大劇場の跡に出た。劇場といへば、唯譯もなく賑はしい、騒がしいものに定つてゐるが、其の嘗ては賑はじかつた、騒がじかつた劇場の、さびれにさびれた跡が、今此にボムペイの中から掘出されて立つてゐるのを見ると、何となく異様の感に堪へぬ。

フォーラムから東に戻つて、丁度前に入つたスタビア門に近づいた所に、三角形フォーラムと唱ふる廣場がある。此の廣場に隣りして、直ぐ其の境を接した所に、二個の劇場が列んでゐる。大なる方は約五千の觀衆を容れ、小なるは凡そ一千五百人を容るゝに足る。さういふ。人口二百萬に近い東京市の中にさへ、三千人を容るゝ劇場はないが、人口二萬足らずのボムペイに、斯な大きな劇場が在つたといふのは誠に不思議のやうだ。併しながら、



ポムペイの大劇場の跡

ポムペイの劇場

是れ一には、ポムペイに芝居がかかること、近郷近村の民が押かけて来たこと、二には、劇場と言つても、必ずしも芝居許りには使はず、大集會、大儀式の類も亦此處で行はれたの由ると、

三百五十

説をなす者は説いて居る。成程、さう聞けば、ポムペイのミスリデー王が、劇場の中で戴冠式を擧げたといふ談もある。

細長い舞臺を正面にして、半圓形に仕つへられた後高の観覽席が三方を圍んでゐる。舞臺の直前が樂隊の席、其の直前の一等席には、今も尙床に疊んだ大理石の平石が澤々と存つてゐる。舞臺は大方毀れてゐるが、樂屋に通ふ道、幕を引いた跡など明かに見える。観覽席は殊に荒れ果てゐるが、夫でも煉瓦造の段々になつた機敷や

通路が、歴々と今に在る。其の頃の芝居は、大抵野天で興行したもので、日が照りつける時は、大きな幌を機敷から舞臺一面にかけて張り渡したものだといふ。其の幌を張るに用ひた柱を突立てた跡だといふ穴が、機敷の後の高い壁の中に明いてゐる。衣香扇影、ポムペイの美人が綺羅星の如く居流れた昔が懐ひやられる。

僕は蓬々と茂つた雑草を分けて、飄然として舞臺に飛び下りて見た。後をふり回ると一行五十餘人が、昔ポムペイの美人が居流れた観覽席の中程、今ならばドレス、サークルといつたやうな所に、茫然として立つて居る。僕は之を見るとき、急に變な氣になつた。何だか僕が役者で、五十人が見物のやうな氣がする。僕は荒敗を極めた野の中で懸命に芝居をして居る。見物は僅に五十餘人、喝采も拍手も聞えぬ。頓て幕となる。幕の上に張紙が有つて、次の幕は前の幕より千八百二十九年後の事と書いてある。間もなく幕が上つたのを見ると、僕も見物人も皆亡くなつて、此の劇場の跡もいつしか消え失せてゐる。唯茫茫たる野原に、野分が颯々と吹いてゐる許り。——と思ふと、僕は襟元からぞうと寒さを感じ

ポムペイの劇場

三百五十一

功名榮達畢竟何あらうぞ。一生やきもきして、一塵悔し得た積りの不朽の名称も、僅に二千年の後には、辛く墓石に止めた無名の名となつて、徒に考古學者の頭を悩ますに過ぎぬ。マーク、トエインの言草ではないが、さしも武勳赫赫たる東郷大將の盛名も、今から五千年の後何が残らうか。明治五千八百四十一年出版の人名字書には、先々斯うもあらうか、

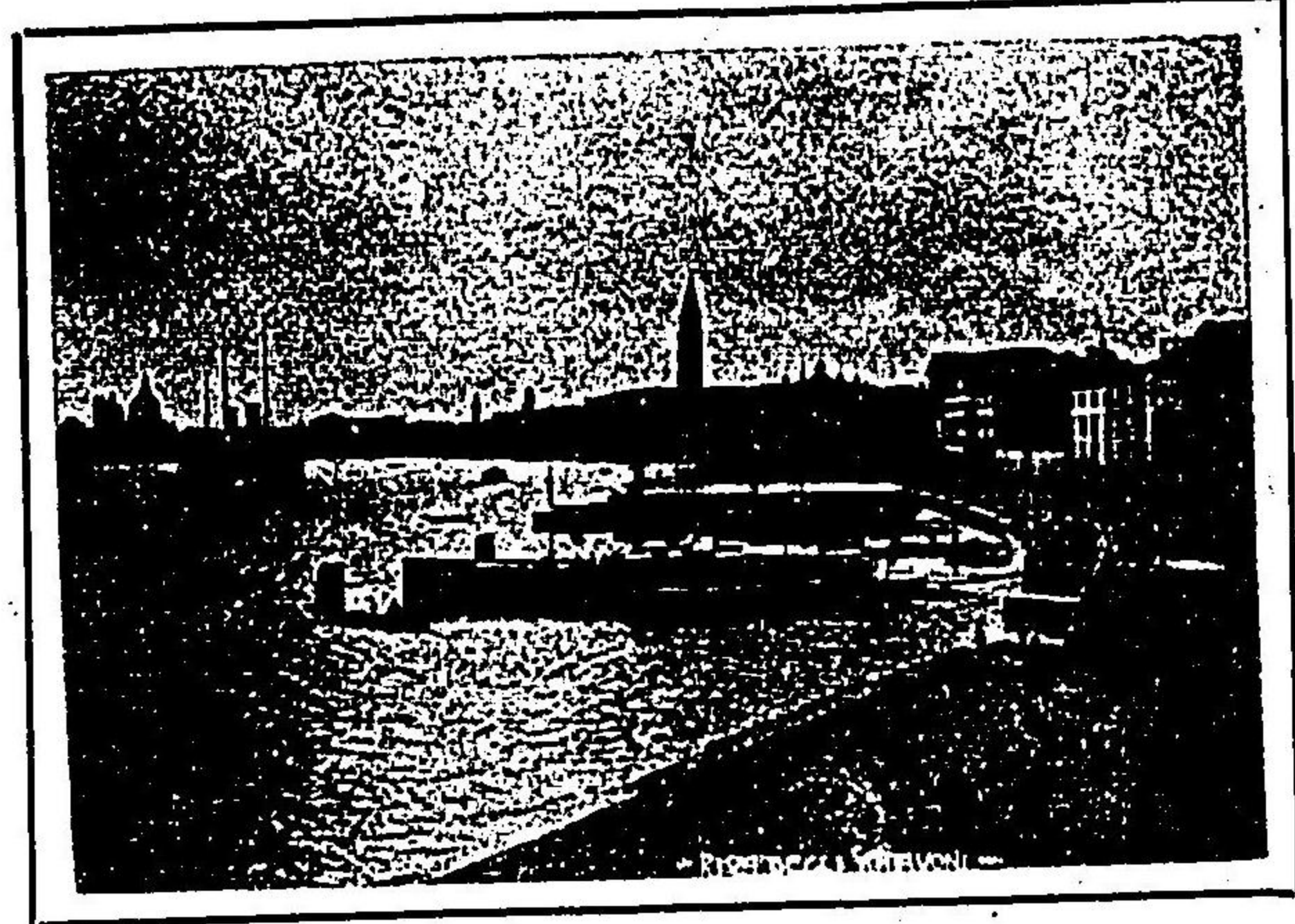
東郷平七(或はいふ平八)——日本領西伯利亞莫斯科出身の詩人、紀元前七百四十二年頃にもて囃された人なりと云ふ。博識なるアキラナンド氏の考證に依れば、英國の詩人(?)シエークスピアと同時代にして、日露戦争後二百年頃の人なりきともいふ。其の著數十、今一も存せず、傑作と傳へらるゝは、「小三金五郎娘節用」及び「唐宋八大家文集」。

ベニス

十六、ベニスの夜半

今朝九時に羅馬を發した列車は、午後九時四十分ベニスの停車場に着いた。着く前から、既に線路の兩側は海であつたが、停車場を出ると、直ぐ前にベニスの大通とも言ふべき大運河が流れて、此處にベニス市長の好意で差廻された小蒸氣が待つてゐる。一同手早く之に乗り移れば、汽笛長嘯軽く水を打つて、鑿々たる暗車の響と共に、舟は暗を貫いて走り出す。

ベニスは二哩とやらも本土を離れた水上の都、市中を縦横に縫つた大小の運河が、其のまゝの大路小路となつて、其の間を舳の高いゴンドラ船が、櫂聲静に織るが如く往き交ふ。小蒸氣の進むに連れて、突如として揺り起されたやうに、あふりを喰つた水が、ふはと水の上に浮んだ家々の脚に、ふちやりく、打ちつける様、聞くからに、はや肌の冷かなるを覺



ベニスの大運河の岸

ベニスの花牛

三百五十四

える。空には爛々たる星光雨の如く繁く、五層六層巨人の如く突立つた兩岸の家々には、燈光疎に窓より洩れて、時には花やかな笑ひ聲が手に取るやうに聞える。そよ／＼と襟に吹き入る風は、高き潮の香を傳へて、左ながら、終日汽車で浴びた煙塵を、さら／＼と音を立てて掃き落すやうな。

Sの字なりに曲つた大運河の、とある角迄來ると、ぱつと俄に明るくなつて、唸唸たる音楽が聞える。愈近づけば、愈明るく、愈妙なる樂の音に聞き做される。頓て船ひた／＼と岸邊に着けば、丁度我等が宿と定めたホテル、ダ

ニエリの前の、川に沿つた大道に、電燈眩く點し列ねて、彼此三四十人の樂隊が盛んに樂を奏してゐる。其の四圍には、幾百の老若ひじ／＼と雲の如く立ち圍んで、中には雪白の衣涼しげに、縁の廣い麥稈帽を阿彌陀に被つた美人も居れば、漆黒の夜會服にシガアの煙囪々と立つた瀟洒なる貴公子もある。頓て中央の高壇に立つた樂長のバートンの上下に連れて、今まで有るか無きかに聲を潜めてゐた樂手が、忽然として電光閃き雷霆轟くやうに、ぐわ／＼とやん／＼とん／＼と勢を盛返したと見る中、急霰の如き拍手と共に樂は一段を卒へた。樂が已むと、沖合遙に漕ぎ行くゴンドラの中で、マンドリンに合せて、高くはないが能く通る女の聲で、伊太利風の嬌々たる歌の聲が聞え初める。誰か家の郎ぞ、阿嬌を擁してマンドリンを弄するは、と言ひたくなる。

ホテルに入れば、大夢和尚は躍り上つて喜んでゐる。斯んな愉快な所が此の世に有らうとは思はなかつた、尤で龍宮城だといふ。兎に角、夜は深けたが、少し其處等を歩いて見ねば、氣が落ちつかぬといふので、思は同じ僕も直に同意して、二人はふらりと宿を出た。

ベニスの花牛

三百五十五

運河の河岸に沿つて、広い通を行くと、家々は多く大理石造り、道は隙間もなく敷詰められた石畳で、半町位毎に、横町から出る小運河に架つた太鼓橋がある。電燈の光月の如き此の邊を、ぶらり／＼と手を引き合つた男女が幾組となく通る。聞けば、新婚旅行はベニスに限るのださうな。とある珈琲店に入つて、和尚とベニスの爲に祝盃を舉げた後、今度は彼ノア式の薄暗い細い横町へ曲つて見たが、右に曲り、左に曲り、足の向くに任せて、彼此四五丁も歩いて来たと思ふ中、何時しか、廣い／＼通へ出て、正面には宏壯なる大理石の大宮殿の、電燈の光に白く輝いてゐるのが現れた。何處とも知れぬ暗い細道から、突然此の宮殿の前へ出た時は、如何さま水の底を潜つて、龍宮へ出た様な気がした。廣い通りとはサンマルコの廣場。宮殿とはベニスの長官が住んだバラツツ、デニール。此處に来て、初めて、僕の理想なるものは定つた、僕は何でも、ホームベいの發掘委員長といふやうな職を拜命して、毎年冬は羅馬で過し、春夏は倫敦で暮して、秋は東京に送つて、而して最後にベニスで死にたい。(五月二十六日)

十七、ゴンドラ

サンマルコの廣場から、賑やかな通へ曲つて、此處で土産にさて、橄欖のステッキや、伊太利絹のネクタイなどを買込んだ後、さてホテルへ歸らうとするに、何處を何う間違へたものか、道が丸で分らぬ。何でも、初め北に曲つて東へ出たのだから、今度南へ曲れば、ホテルの側の大運河の河岸へ出るに相違ないと、見當をつけたが、さて都合よく南へ曲る角がない。兩側は孰も五階六階の大夏高樓軒を比べて、其の間に僅か半間許りの細い小路が通じてゐる。僕等は逃場を失つた鼠の様に、右に行つては突當り、左に曲つては後に戻り、偶ばつと開けた所へ來ると、其處に小橋が架かつて、其の先は何やら人の家へ入つて行くらしい。「何うする?」心細げに榎並法學士(まが)が聲を上げた。「何うするツて外に仕方のあるものでない、無論歸るサ。さ僕はえらさうに言つて見たが、實の所僕もち心細い。今一人の勝田君はと見返れば、先生目玉をぎよつかせて歸る／＼言うても、斯なこと許



場廣のホルマ、ンサ、スニベ

りしてゐたら、何時迄経つても歸れやへんせ、はうー」と泣き出しさうだ。

先か後かといふ意味だ。此の怪い質問を彼是五六度も試みて、何うやら斯うやら海の岸へ

を閉ぢて、人の氣はひもせぬ。デスデモナが何處に居るやら、シヤイロツクが何をし
てゐるやら寂然としたものだ。辛く通りか
かる人を見つけて尋ねて見ても、生憎と英
語の分るやうなのは居ない。日本語などは
尙以て通せぬ。仕方がないから、持合せの字
引を引張り出して、「海は何方の方」と聞く
積で、覺束なくも「イル、マール」と言ひな
がら、前の方と後の方を指さして見せる。

出た。出は出たが、ホテルの河岸とは似ても似つかぬ所へ出て仕舞つた。

ゴンドラ！ゴンドラ！ 居合せた船頭がゴンドラに乗れと勧めに来る。乗りたいたは山々
だが、遠さも分らず、價をつける術も知らぬ。其中、船頭が一人殖え二人殖え、果は近所の
野次馬連中迄が大勢出て来て、僕等を押つけ取り圍んだ。此等が巻舌で「ラ」行の音を無暗に
びよらせて、勝手に何やら喋りまくる。其の喧しさは非常なものだ。凡そ天下の喧しさも
の大夢和尙の顔と、ゴンドラの船頭に如かずと、僕は心得てゐる。

幸ひにして、此處へ五十年配の願替むじやくと生えた、人の宜さうな人が通り懸
つた。之が僕等の不可思議な佛蘭西語を聞き取つて、親切にゴンドラ一艘ホテルの下迄二
リラで雇つた呉れたので、僕等は初めて浮び上つた。——船と船とが矢鱈に尖り上つた全
面黒塗のゴンドラの中へ、三人腰を下すと、孰もかはらぬ黒の中折帽に、黒ズボン、之に
上着に代へて白い下衣を着けた八字髭の船頭が、レモ(櫓)を櫓杭とも見るべき、フアルコ
ラに宛てがつて、ゆらり〜と漕いで出る。(五月二十七日)

中歐東歐

一、瑞西の山河

杉本 蒼 野

午後一時四十分汽車はキヤンソノ驛を過ぎて、身は初めて此に瑞西の地に入つた。間もなく、ルガノにさしかゝる。湖光爽涼、山青く、水緑なる邊に、赤く塗つた伊太利風の家が、三々伍々打列んでゐる。如何にも世の中は瑞西めいて來た。ヘリンゾナ驛を通り過ぎると、此の邊すべて兩側は千仞の絶壁、遙けき嶺は淡く雪を戴いて、其の雪解の水が糸の如き幾十條の瀧となつて、蜿蜒と山の腹を流れ下る。麓の方は青々と茂つた栗胡桃、無花果、桑の樹が鬱葱たる林を成し、之を貫いて、テイチノの碧流が滔々と線路に沿つて流れてゐる。汽車は身を沈めて、がらりと隧道の中に潜り入るよと見る中、忽ち雲を翔けるが如き鐵橋の上に出る。下にはがたがたと落ち込んだテイチノの奔湍岩に激して、花と散り雪と飛ぶ。眸を放てば、過ぎ來し村々家々が森の中に半ば隠れ半ば現はれてゐる。函

中 東 歐

半 球 周 遊



瑞西の山河

見飽かぬ眺めに殆ど我と我身を忘れた。盆栽のやうな山水ならば知らぬこと、斯な大きな

瑞西の山河

三百六十一

嶺の早川にも似たるテイチノの河を、或時は右にし、或時は左にし、高き上る時は、脚下の里や野や森を一眸に

鍾め、低きに就く時は、左ながら車を埋めたやうな青葉若葉の下を走る。其の間習々たる春風絶えず車窓を音づれて、塵も颯らず、暑さも覺えず、我等は刻々に變り行く山河の景色を右に送り、左に迎へ、

瑞西の山河

眺が日本の何處にあらうぞ。成程、瑞西々々と言ひ囃す筈だ。
 ベリンゲンナからルツェルンに至る百餘哩の間に、隧道の数が約八十、四間以上の鐵橋が三
 百二十四、之より小なるものに至つては其の数を知らぬといふ。其の隧道の中に螺旋狀隧
 道といふがある。勾配の急な坂道を上るに、一直線には行き抜け難いので、山の腹の中を
 くるくると貝の尻の様に舞ひ上る。入る時は、低い口から入るが、隧道の中で大きく一廻
 りして、出る時は道な高い處へ出る。窓から首をつき出して見ると、今も通つた線路が
 直ぐ目の下に見えて、上るに随つて、眼界が次第に廣く開けて来る。何さまセント、ゴター
 ド線とて、世界に名だたる大工事と呼ばれるだけのことはある。
 頗てラビ、ブラトー、フレデオの三螺旋狀隧道を過ぎて、五時近い頃アイロロ驛に着
 いた。之から先は線路の名の由つて來つたセント、ゴタードの大隧道である。長さ九哩四分
 の一、世界一のシンブロン隧道より短きこと三哩、之を通り貫けるに急行で十四分二十秒、
 普通二十一分半かゝるといふ。此の隧道の真中が海拔三千七百八十六尺の高さで、南北の

瑞西の山河

分水嶺となつてゐる。汽車がたたくと軋り込むと、線路の兩側には、千メートル毎に一
 つ宛つた洋燈が、ちらちらと遠く車の脇に列つてゐる。
 此處を出ると直ぐゴッシェーネン停車場。天地風物一時に變つて、見渡す山々も大地も
 白雪皚々、雪が今尙盛に降つてゐる。突兀たる巖山の嶺から、折しも吹き荒ぶ北風に煽
 られて、紛々と雪の飛び散るさま、凄まじいと言ふ許でない。見れば、今迄南に流れた
 テイチノの流れは何時しか消えて、此處ではラインの上流ロイスの流れが、碧を湛へて北
 の方に流れて行く。
 汽車が動き出すと間もなく、此の車に乗り合せた美しい若い英吉利の娘が、つかつかと
 僕等の車に入つて來て、まだしとくと雪に濡れた野草の小さな花束を、同室の婦人一同
 に呉れた。花の名を問へば、莞爾と打ち笑つて曰ふ、アルプス薔薇だ。——外にはまだ小
 歌もなく雪が降つて居る。(五月二十八日)

(手記)

二、獨逸の生氣

僕は獨逸が好だ。獨逸と言つても、僕の知つたのは、北でアイトクローネン、伯林、ケルン、南でフランクフルト、ストラスブルヒ、ウルツブルヒ位のものだが、何處に行つても、獨逸には獨逸臭い所が有つて好だ。多くの點に於て、日本の學ぶべき國は實に獨逸であること迄思つてゐる。

獨逸には、到る處生氣が溢れてゐる。新興國の元氣が充ち満ちてゐる。現状に安んぜぬといふ心意氣が萬事萬物の上に現はれてゐる。進めらるゝものならば一步も進めたい、改められるものならば片時も猶豫せずに改めて行きたいと、ひたもの藻掻いてゐる。藻掻いて居るが、亞米利加の様に頭を熱うしてあせつてゐるのではない。いはゞ秩序的に藻掻いてゐる。世間で伯林の噂をするに、直ぐ例の貼紙を言ひ出す。實にも伯林には、兎せよ角せよと、一々に差圖がましい揭示が何處に行つてもある。汽車に乗れば、頭を出すか

らず、「窓を開けるには何やらすべし」、「電燈は何やらして點すべし」など、五月蠅いほご様々のことを書いてゐる。或る口の悪い英吉利人が伯林を「禁止の都」と評したことにさへある位で、何を禁ず、彼を禁ずと、行くとして「禁ず」ならざるはない。日本にも随分あるが、伯林のは更に其の上を行く。併し此の數々の禁止揭示が、即ち是れ新一國の秩序を造り上げんと藻掻いてゐる様を顯したもので、之に依つて民に其の依る所を知らしめてゐるのである。百般の事物に於ける秩序が、百千年來の習慣に依つて、整然と定まつて仕舞つた英吉利の如きは、學ばうとしたとて俄に學び得るものでないが、獨逸の如き新興國が、新に其の秩序を法律命令に依つて定めんとする努力は、儘に日本の學ぶべき點である。僕は確信してゐる。國內の秩序風俗の爲にだに、之だけの努力を惜まぬ獨逸が、其の國勢の増進國運の發展に全力を注いで、尙足らずとしてゐるのは無理もない。僕はゼノアに行つた時、此處が伊太利の領土に存じながら、事實殆ど獨逸の經營に任じた所を見て、實は悚然として戰慄したのである。

獨逸の生氣 三百六十六

所が、獨逸は貧乏だ。貧乏は日本の如く貧乏だが、貧乏に對する國民の心掛は日本と大分違ふ。日本人は金もない癖に、動もすると、金持の先進國の眞似をしたがるが、流石に獨逸は貧乏で済してゐる。獨逸が未だ會つたばかりも萬國博覽會を催さぬのも、博覽會が詰らぬといふカイゼルの負惜みの外に、未だ斯なお祭騒ぎをする程な餘裕ある域に達してゐないのを自認してゐるからだ。英米の綺羅錦繡を纏ひ、金銀珠玉を飾つた有福な人々を見るに、身の程も知らずに、人並らしく金剛石だ紅寶石だと騒ぎ廻る輩は、宜しく獨逸に願ふ所あつて然るべきである。獨逸人の勤勉にして勘定高いことは名代のものだが、知つた者同志會食でもすれば、其の場できちんと費用を割り當て、銘々から取り立てる。伯林の市中を歩けば、亞米利加邊で、さしもがやくと居る靴磨の小僧が、殆ど一人も見當らぬ。聞けば、靴なんごは銘々自分で磨くものと定めてゐるさうな。市中に落ち散つた石炭を拾ひ歩く日本の屑拾ひの如きものも居れば、如何な大商人も晝はサンドキッチで済ますに限るとの話もある。僕等が伯林の大勤工場ウエヌテンの店三に出掛けた時、入口に日本の下

足函のやうに、少く仕切つて、番號を附けた函が立つてゐた。初は何に使ふものか知れなかつたが、段々見てゐると、此處へ入る人々が、中では喫煙禁止とあるので、入り際に吸ひかけてゐた巻煙草を消して、此の番號の附いた棚へ載せておく。出しなには、自身の番號を覚えてゐて、元の吸さしの煙草を持つて歸るのだといふ。僕は之を見た時、流石に獨逸だなと感心した。

出された珈琲の中に蠅が一匹入つてゐるとする。亞米利加の人ならば、眼を怒らして給仕を叱り飛ばす。英吉利の人ならば小聲で給仕に注意して、人知れず取り代へさせる。佛蘭西人ならば、可愛想可愛想とか何とか云ひながら、匙で蠅を掬ひ上げてやつて置いて、其の儘飲み干す。獨逸人に至つては、蠅も何も其の儘ごちやくに匙で掻き廻して、ぐつと飲んで仕舞ふ。といふ話がある。獨逸人の粗野なるを罵る積で拵へた話だらうが、僕は寧ろ其の粗野なるを愛する。

三、伯林の長夜の宴

十一時半になつて、漸と食事は済んだが、まだ中々解散しやうにないので、僕は本社への電報が急ぐといふ口實の下に、一步先にホテルへ歸つた。

實は、今晚或る所で、或る人々の催しにかかる歓迎晩餐會へ、一周會員一同招待を受け、午後八時といふ案内に出かけて見ると、先會長の挨拶がある。初は獨逸語でやつて、次で自身之を日本語に譯して聞せる。之が済んで、愈別室の食堂に入つたは宜かつたが、第一番にスープが出て、また魚肉の出ぬ中に又演説だ。獨逸語の演説が二つ續いた。憚りながら、陳芬漢紛更に分らぬ。何とかしてゲガンゲン、ハット、又何とやらしてノッホ、ニヒト、ゲゲーベン何とかと、喉の痛くなるやうな喉音が續々出て来る。譯は分らぬながらも、獨逸語の演説はきびくして元氣があつて宜い。演説は宜いが、其の演説中は獨逸式でも言ふものか、スープの後も差扣へて一向持つて來ぬ。

頓て魚肉が出た。之を平げると、今度は土屋大夢和尚の下手な日本語の演説が初まつた。やれ〜と思つて居る中、其の次誰であつたか、之を獨逸語に譯して聞かせる。――部屋が窓のない、随つて風通しの丸でない所なので、如何にも暑苦しいが、まさか此處で團扇を使ふ譯にも行かぬ。今朝は何時にない早起をして、炎天の下に觀兵式場を駆け廻つたことゝて、孰もぐつたりと疲れて、中にはこく〜居睡を始める者もある。怪しからぬことだと腹の中では怒つて見たが、眼の方では早承知せぬ。僕迄がころ〜となつて來た。其の中御馳走は追々に出たが、演説は時を選ばず續いて出る。孰も通譯附だ。やつと食事の果てたのが午後十一時半。八時から丁度三時間かゝつてゐる。獨逸では斯なのが御馳走なのださうな。之で解散かと思てれば、今度は「幻燈を御覽に入れますから別室へお移り下さい」と來た。僕は濟まぬことと思ひながら、別室へ移るやうな顔して、戶外へ出て仕舞つたのである。

ホテルへ歸つて、電報を打つて仕舞ふと、早くも十二時は過ぎた。其の中續々連中が歸

林の長夜の宴

三百七十

つて来る。もう濟んだか問へば、孰も『いやまだ中々』と言つて笑つてゐる。電燈の光
眩きホテルの玄関前には、二人三人づゝ勢のない睡さうな顔して、追々に引上げて来る。
此の又引上げて来る人々を待ち構へて、此處に綱を張つた怪しげな女が、一人二人ならず
彼方此方に立つてゐる。中には、何やら之にからかはれてゐるのがある、手を取られかけて
るのがある、後を追ひかけられて、今しも貰つて来た花を取り上げられてる人もある。先に
歸つた者は夫が面白いとて、ホテルの戸の中からわい／＼云つて之を見てゐる。いや伯林
はえらい所だ。

午前第一時を過ぎて、大夢和尚はひ、よ、ろ／＼に成つて歸つて来た。何したと聞けば、
流石の和尚も眼を白黒させて、あれから七十何枚かの幻燈を見せて呉れて、夫がすむと、
十餘番の長い／＼獨逸の歌を聞かせて呉れて、夫がすむと、又麥酒が出て、演説やら乾杯
やらがあつて、今始めて解散した。中座しては失禮と存じて、最後迄踏み止まつたが、僕
と共に踏み止まつたのは、一行中唯僅に三人ざりと、ふう／＼言つてゐる。

併し歓迎の厚意に至つては、孰れも深く感佩してゐる。(六月一日)

四、露國の不夜城

したゝかに晚餐を喫め了つて後、メドエチを出したのは、彼此夜の十一時過である。夜を
知らぬ夏の彼得堡のこととて、外面はまだ中々明るい。兎も角も、馬車を雇つて、プ
フへと志す。僕と大使館の仙風居士と、露國外務省のワズニエスキ君と、合せて
三人。

今日夕方、一周會の人々は、大夢和尚と共に、莫斯科に立つて仕舞つた。之を停車場に見
送つて後、僕唯一人、茫然とプラットフォームに立つてゐると、約束通り、二人は息せき
と此處へやつて来て、之から一所に食事をして、今夜は夜中遊び歩かうと、いふことにな
つた。ワ君は居士と彼得堡大學の同窓とやらで、まだ若い快活な人だ。ワ君と僕とは英
語で話す、僕と居士とは日本語で話す、居士とワ君とは露語で話す。三人通じての話にな
露國の不夜城

三百七十一

露國の不夜城

ると、居士はワ君の露語を日本語に、ワ君は居士の露語を英語に、僕はワ君の英語を日本語に、一々通譯して聞かせる。何か可笑しい話になると、三人一度に笑ふことはなくて、先づ順々に通譯がついてから、順々に一人宛笑つて行くといふ始末である。複雑なものだ。

愈々メドエチに入ると、如才のないワ君は頻に酒を侷める。ウワトカにも色々あつて、之は露西亞のウワトカ、之は英吉利のウワトカ、其の次は亞米利加のウワトカと、次々に色々のウワトカが出る。果は女の飲むウワトカといふの迄出されて、僕も大分参つた。もう酒は要らぬから、曹達水を呉れといふと、委細心得て、露西亞には非常に旨い曹達水があるとして、ワ君の侷めるのを見れば、之は如何なこと、シヤンペンだ。何とんでも飲ませずんば已まぬ。又もや大に参つた。露西亞では、之でなくちや御馳走にならぬのだと、ワ君が言ふ。

此處を出て、プツプツに行つて見ると、緑濃き廣い公園の中に、盛に音楽の音が聞える。野天に舞臺を仕つらへて、合唱やら、舞踏やら、様々なものが演ぜられて、老若群集して、

露國の不夜城

之を立ち圍んで見てゐる。電燈の光花やかな舞臺の上には、金銀紅紫の装ひ美はしい美人が、立ち代り入れ代り踊り狂ふ。一方幾百の觀衆の間には、例の眼險を薄鼠に染めて、脂肪の粧を凝らした怪しの女が、長髪翻々として來往する。成程、露西亞は陽氣な所だ。此の陽氣な様が、夜の十時、十一時から始つて、十二時一時に其の盛を極めた後、朝の三四時迄打續くのだとは驚く。戦争の最中、戦ひが負けた、船が沈んだといふ報知が、續々接踵した

露 部 西 京 聖 院



時にても、此の公園の夜の賑ひは、一向平日と變らなかつたといふに至つては愈以て驚く。初瀬沈没の報に接して、満都の士女頗に色を失ひ、世間一時に火の消えた様に惰氣返つた日本などから見ると、流石に露西亞は大きい。十二時過には、歌舞管絃の音を禁じ、怪しげな女と見れば、公園の共同椅子に凭つた者をさへ追ひ立てる日本の警察などに比べるゝ、流石に露西亞の警察は粹なものだ。唯併し、日本は飽迄も小さかれ、何時迄も無粋なれど、僕は裏心から祈つてゐる。

十二時過に爲つて、演奏が一段終ると、約六十名の露國の軍樂隊が、忽ち元氣よく樂を奏し初める。如何にも賑かだ。之がすんで後は、觀衆一同がややくと、其の隣に設けた大食堂に入る。ワ君に促されて、僕等も其の中の小さな卓子を圍んだ椅子に着いて、又もや露西亞の強い酒をちびくこと飲み初めたが、今度は此の大食堂の正面に仕つらへた舞臺で、前と同じ様な音樂舞踏が初まる。如何さま、夜が深けて、物欲しくなつた頃を見計らつて、舞臺を代へるなどは考へたものだと、僕はつくづく感心した。感心すると同時に、露國の

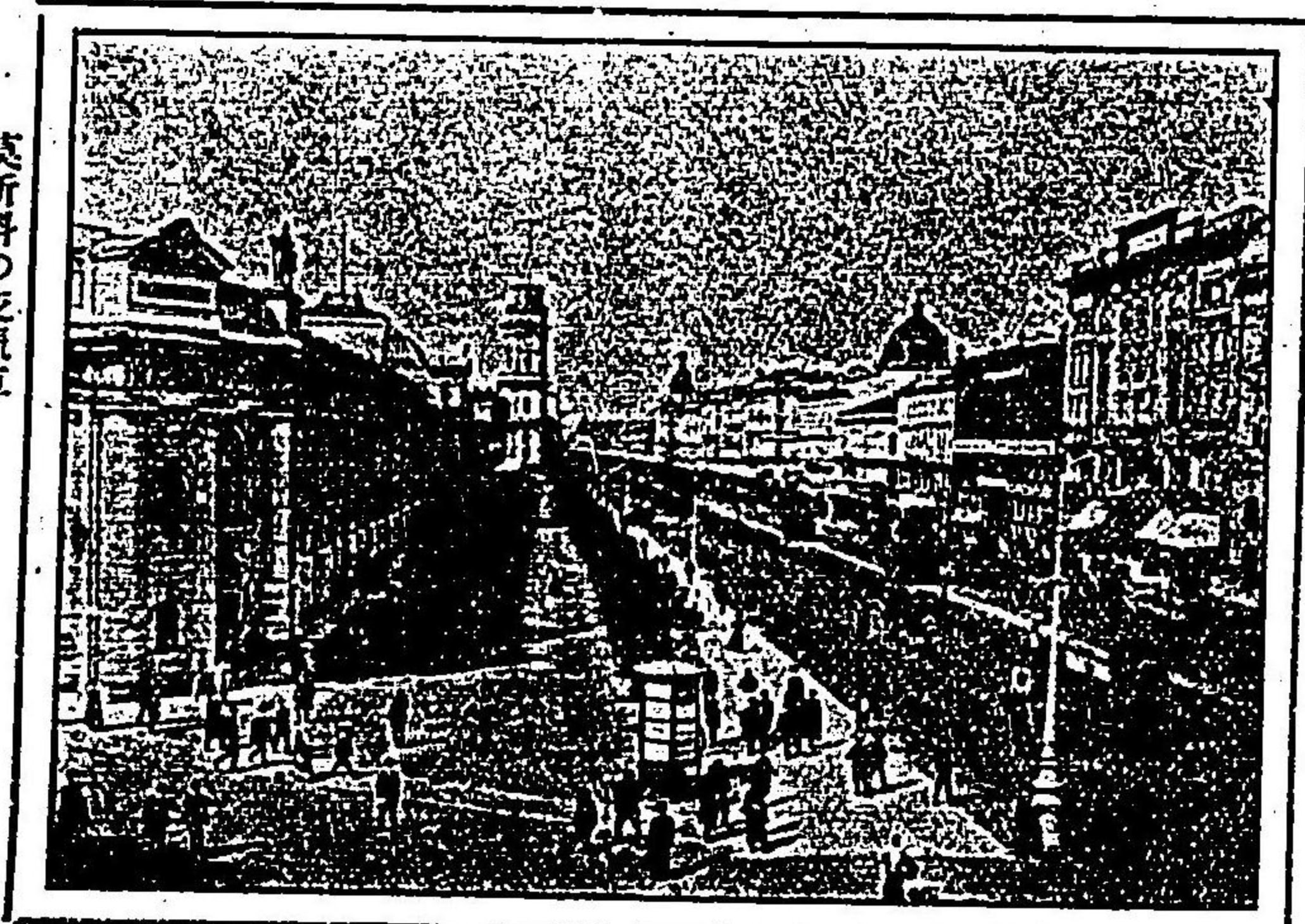
爲に一種氣の毒のやうな念を禁じ得なかつた。

一時過になつて、夜は早やほのくど明け初める。ワ君に暇を告げて、仙風兄と共に此處を出ると、外には夜を籠めて、客を待つ幾十輛の馬車が、すらりと列んでゐる。手當り任せに、其の一つに乗り移れば、御者は行先も聞かずに飛直に駆け出した後、やう程経て、初めて、何處へ行くのだと聞く。仙風兄打笑つて、此奴寝た儘で駆け出して、今眼が覺めたのだけせといふ。如何に露西亞でも、之は又餘り暢氣過ぎる。頗て御者は僕等を日本人と見て、露に日本の徳を頌し初め、果は自分も生國は亞細亞で、君等と同國人だなどと言ひ出した。亞細亞生れで同國などは、何處迄も大きい。此の大きい男が、話に浮かれて三四丁もホテルを通り越した後、仙風兄に叱られて、又後に戻つた所などは、何うしても露西亞だ。

斯くてホテルに着いたのは午前二時。夜は全く明け放れた。(六月五日)

五、莫斯科の夜汽車

愈々午後八時發莫斯科行の列車に乗り込んで、彼得堡を立つことになった。
 長谷川君が「朝日」の露都特派員として來ることを、夢にも知らなかつた僕は、一週會員が昨日既に立つて仕舞つたのを幸ひ、寧ろ、かうくしく構へて、此處に踏み止まつて見やうかとも考へた。丁度近い内に、レワルで英露兩帝の會見があるので、汽車が込合つて、迎も切符は買はれまいとの話もある。去年世話になつた「大阪毎日」のマツカラ君からも、是非留まつて、一所にレワルへ行かうと誘つて呉れる。外務省のワズニエセンス君の如きは、愈々居残るなら、居心地の宜い下宿も探さうし、露語の教師には、若い素ばらしい美人を推薦しやうと迄言つてくれた。所が、去年以來僕の顔を見る毎に、露都逗留を僕に勧めた仙風居士が、今度はごきやんこつ言つても承知せぬ。社長が承知してると言つても、汽車の切符が買へぬと言つても、マ君とレワルへ行くのだと言つても、ワ君が美人



莫斯科の夜汽車

露都フネキス、プロスバトク

の教師を雇つて呉れると言つても、先生首を打振つて、出直すなら大賛成だが、居残るなどいふそぎやんばかんこつが有るものかと言ふ。到頭、大使館からニコライ停車場驛長宛の添書に、「朝日新聞特派員誰某、急用歸國に付、萬障差繰、一等切符一葉是非お買渡し相成度、云々」と書いたのを持つて來て呉れた。居士の意見は、何でも一度出直すに非ずんば緩くりと留まつて居れぬと言ふに在る。一旦歸れば、さう容易く出直されるものでないことを御存知ない。永く露西亞などに居ると、人間はごきや

ん迂濶になるものかと可笑しい。
 詮方なく愈歸國と定めて、停車場へ来て見ると、一等は既に賣り切れて、二等も、今少し待つて見ぬと、有るか無いか分らぬといふ。見送りに来る筈の仙風居士が、何時迄経つても見えぬので、ホテルから来た男と、譯の分らぬ佛蘭西語の問答、何時要領を得さうにもない。其の上彼得堡は、此の六月六日といふ夏の日に今朝からの大雪で、其の寒さは丸で冬に異ならぬ。唯冬ほどに暖室の用意がないので、尙以て寒い。あざやんながらこつ露西亞に居たなら、六月六日に雪の降る位のことには心得てゐさうなものだと、今更罪もない仙風居士が怨めしくなつて、僕は幾度か腹の中で呪咀した。
 仙風居士は竟に影を見せなかつたが、やつと二等車の上の方の寢臺の切符が買へたので、早速車に入る。車掌が来てにこ／＼しながら、まだ外の乗客が見えぬのを幸ひと、僕の切符の番號を變へて、下の寢臺に移して呉れた。露西亞人の愛想の宜いことは、何時もながら感心する。頗て三人の乗客が追々に入つて来た。一人は若い陸軍の少尉、一人はべら

ほうに背の高い八字髭の男で、何だか話の様子では革命黨ぢやないかと思はれた。今一人は丸顔の愛嬌の宜い商人風の男で、之が僕の革囊を棚に上げるのを手傳つて呉れた時、ふと英語で話しかけたのが縁となつて、獨逸フランスキツクの商人、名をアハテルマンと言ふことが分つた。
 ア君は親切に何かと世話を焼いて呉れた。其の通譯で、後の二人とも知り合になり、世間談賑やかに打興することもあれば、連れ立つて停車場へ食事に出かけることもあつた。兎ある停車場で一所に茶を飲んで居ると、皆々僕のせか／＼と落ち着かぬを笑つて、此處の停車場には滅多に乗り後れることはないよ、革命黨かいよ。何故かと聞けば、此處の親父は金の切放れが宜いからだといふ。一同して又笑つた。後でア君の説明を聞くに、何でも此の邊では、食堂の主人から車掌に贈る賄路に依つて、停車時間が長くも短くもなることであつた。
 沿道處々に雪が積つて汽車の中は中々寒い。ア君は給仕を呼んで、寒暖計を拵さしながら

セイ、チャス
 ら、斯う寒いのに暖爐を焚かぬ法があるものか、遞信大臣に言ひつけるぞと言ふ。給仕は流石露西亞人だ。そんな脅迫には驚かぬ。早速片手に持った蠟燭で寒暖計の尻を暖めながら何やら言ふ。一同は笑つた。聞けば、「下つたら又焼きに來ます」と言つたのださうな。

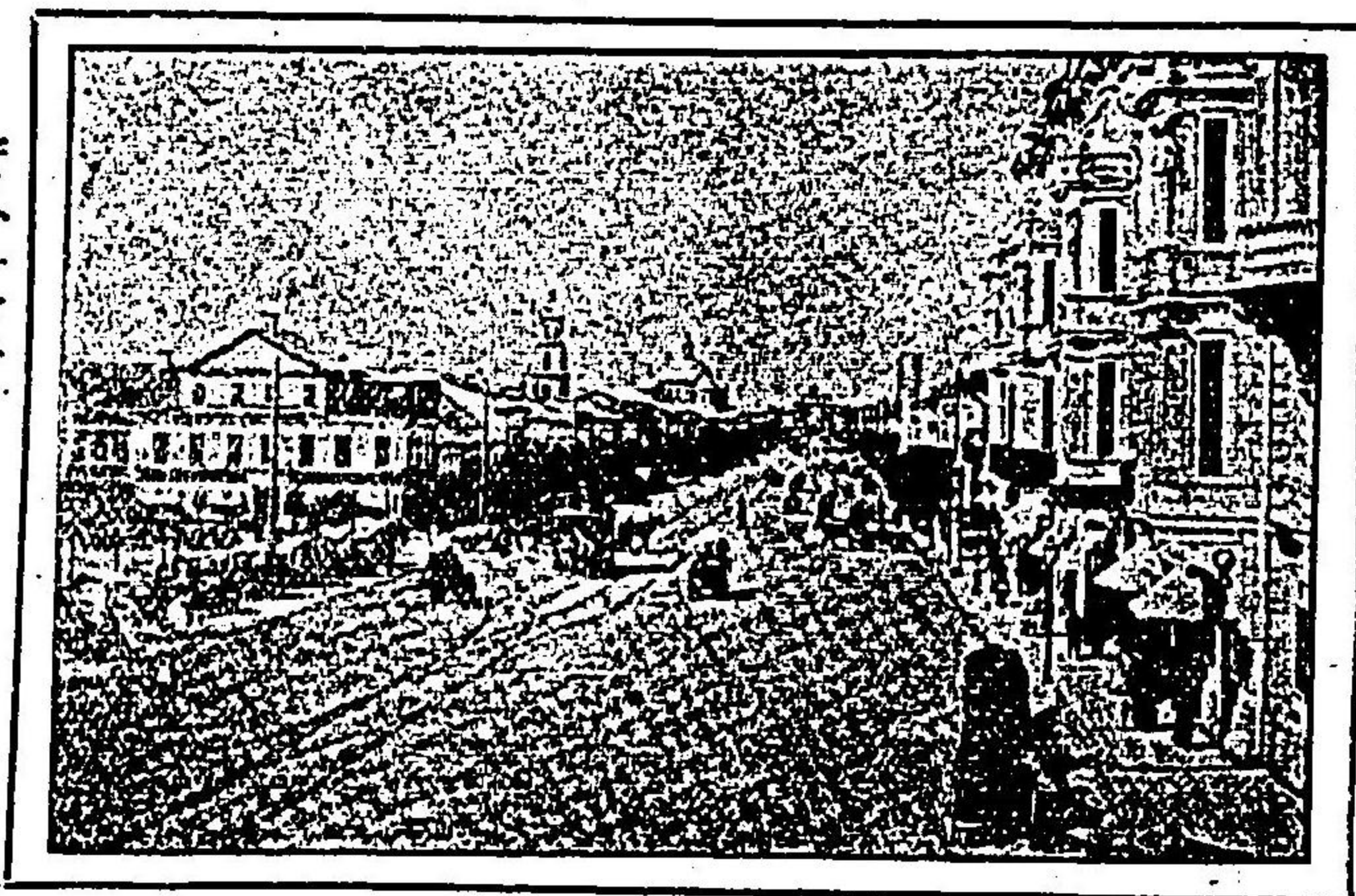
其の中十二時近くなる。僕は給仕に寢床を作らせる、ア君は豫て用意のシャツやら毛布を出して自身で作る、少尉と革命黨とは、二階の寢室にごろりと寢て、足の所へ外套を被せたきりで寢て仕舞つた。

車は夜の内に南へくゞと走つて行く。(六月六日)

六、セイ、チャス

放蕩息子の朝歸りといふ様な、睡さうなぼんやりした顔で、僕は莫斯科のホテルに着いた。一周會の人々は、今しも「雀が岡」へ出掛ける所たこかで、大勢玄關に立つてゐる。まさか、僕が謀叛を起して彼得堡に留らうとした事情を、誰も知りはいないが、何だか變

セイ、チャス



莫斯科ルエツク街

に氣がさして、人に顔を見らるゝのがつらい。挨拶をこゝ、其の儘自分の部屋へ駆け込んだ。手早く衣物を脱ぎ棄て、手水を使つてゐると、こつくと戸を叩く者がある。「セイ、チャス!」僕は我を忘れて呼ばつた。「セイ、チャス」これは「一時間の中に」といふことで、露西亞では之を「今直ぐ」といふ意味に使ふのである。「今直」が「一時間の中に」であるのを見て、如何に露西亞人の悠長なるかは察しられる。僕は急ぎシャツの襟をかき合せて怖々首だけ出して戸の外を覗くと、ギルチネン君が左も嬉しさに莞爾々々として立つてゐる。ギ君は十

七年餘り莫斯科にゐる英吉利の商人で、去年は色々世話になつた人だ。今にも此の方から尋ねて行かうと思つてゐたら、先手を越して對手からやつて来た。流石に、英吉利人は「セイ、チャス」など言つて居らぬ。

三百八十二

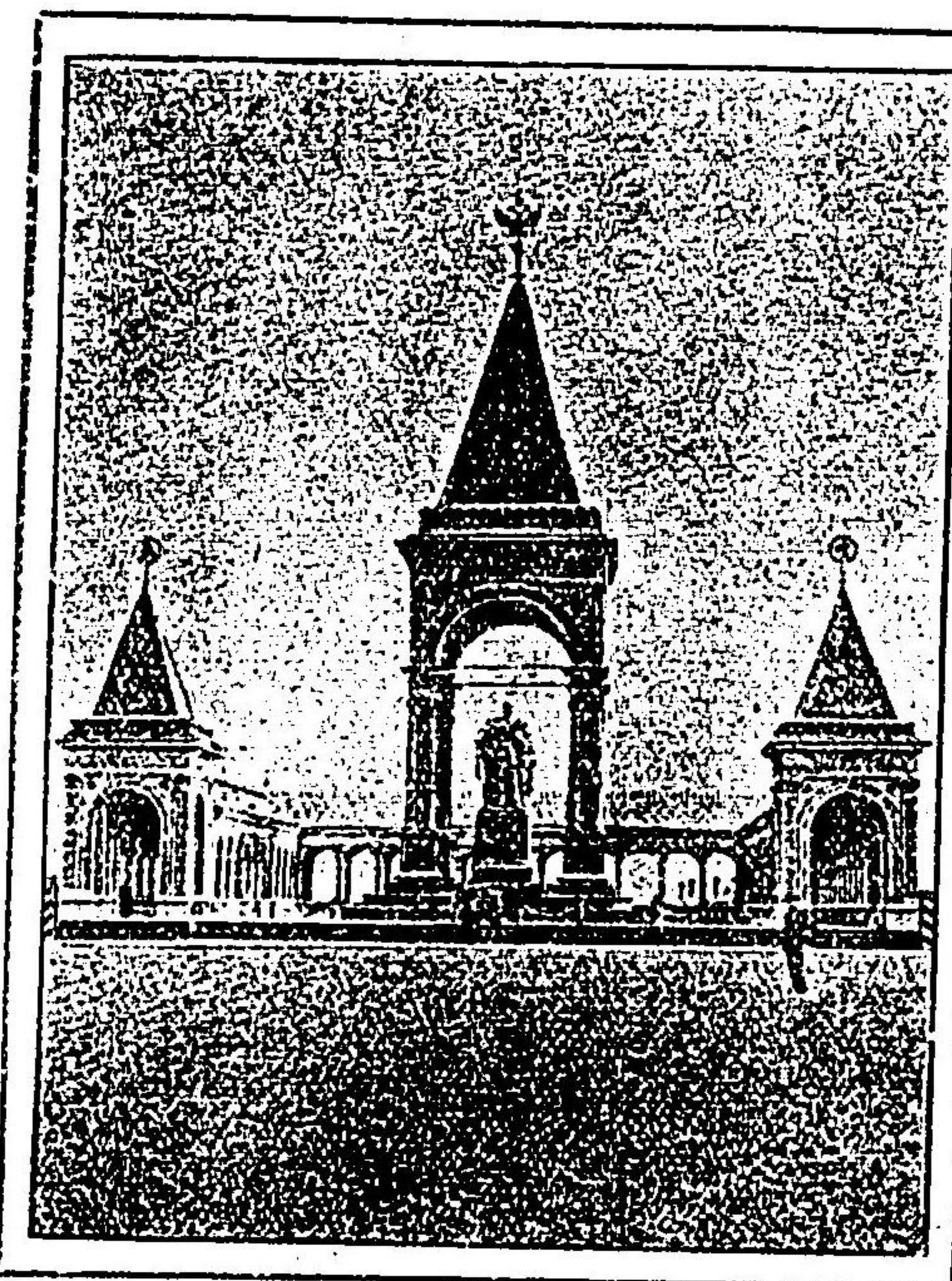
兎も角も、半ば裸體の儘で座に請すれば、ギ君兩手で僕の手を堅く握つて、去年分れる時は又何時會はれるかと思つてゐたが、今日彼得堡の新聞で、初めて君の来たことを知つて、昨日から探し廻つてゐたのだと、言ひながら、僕の膝を叩いて、能く来たねえ、能く来たねえと繰返す。如何にも能く来たらしくなつて来た。事私に涉つて相すまぬが、去年會つた時は、丁度宅から大病人の報知があつて、始終くさくさとしてゐたが、其の病人も治つた今日、此處で再び君に會ひ得たのは、僕に取つても非常に嬉しい。

少し公園を歩いてから、食事と共にしやうといふので、馬車を驅つて、お馴染のペテロフ公園の森の中を乗り廻した上、ホテル、ナショナルの食堂に入つた。食卓に就くと、丁度莫斯科市街鐵道の用で來合せた英吉利の某鐵道材料會社員マレンク君と技師某君とに落

合つて、夫に紹介せられた。會話が賑かに初まる。技師氏の談に依ると、其の某會社では莫斯科に電車を敷く契約で、測量もやらせ、鐵道材料も取り寄せ、愈近日工事に取掛らうといふ間際になつて、突然理由も言はずに、市の方から都合により解約とばかり申し込まれたとのことだ。其の以來理由を聞きに行つても、「セイ、チャス」、損害要償の掛合に出掛けても、「セイ、チャス」、何を言つても「セイ、チャス」で持ち切つて、今に堪が明かぬ。露西亞人はどう無責任な者はないと、頻に憤慨してゐる。其の後を引き取つて、側にゐたマレンク君が、露西亞は「セイ、チャス」で、僅に「一時間」だが、葡萄牙では、何を言つても「ア、マニアナ」と来る。「ア、マニアナ」は明日といふことだと笑つた。僕が日本の紺屋はまだ其の上を行つて、何でも角でも、「明後日」だと言ふと、一同は又笑つた。食事が終つて、一同煙草を吹し始めた時今の英國皇帝が今日迄に一番身心を悩まされた大事件といふのをギ君は語り出した。陛下がまだ皇太子であつた頃、何處やらの皇帝を主賓として、數々の皇族やら外國大使と共に、獵に出かけたことがある。獵終つて野外で食

三百八十三

セイ、チャス



アキレサドニル帝記念碑
(原形に在り)

はれ、此の遠來の珍客貴賓に對する響應が、首尾よく終りを全うするか否かといふ問題が、

事をしたが、愈煙草といふ段になつて、誰にも燐寸の持合せがない。宮内省の役人共必

三百八十四

死になつて探し廻つた處が、漸く某皇帝の衣裳から唯一本出て來た。扱出では來たが、其の折角の一本を、うっかり點け損つては大變といふので、誰も點けやうとする者がない。餘儀なく一同に籤を引かせて見たら、エドワード殿下に當つた。あ

係つて此の一本の燐寸のつく、つかぬにあるといふので、其の時の殿下の御心配は一方ならず、生來未だ會つて之ほど心配な燐寸を摺つたことはない」と、其の後屢人に語られたさうな。

ホテルに歸つて、初めて僕の旅行券に裏書のないことに気がついた。今日は日曜日で、裏書は多分もう出來まいと皆々いふ。出來ねば寧ろ莫斯科に留る迄と、腹を括つたが、今度は君が承知せぬ。打連れて警察へ出掛けて、彼方で「セイ、チャス」、此方で「セイ、チャス」を食つた揚句、漸く汽車の出る迄に是非間に合せると迄、談が運んだので、愈

夕七時發のシベリア列車に乘込んだ。幸にして、旅行券は間に合つた。汽車が愈動き出した時、見送に來たギルチネン君が、帽子を振りながら、是非今一度莫斯科へ來玉へと、繰返し〜いふ。僕は窓から首をつき出して、「セイ、チャス、セイ、チャス！」(六月七日)

セイ、チャス

三百八十五

七、シベリアの夕月

午後九時汽車はクラスノイアルスクの一つ手前の、名も知れぬ小さな停車場にはたと止つた。停車場とは言つても、野中の一軒家、四邊には、回避線に入つた列車が三つ四つ匝つたやうに列んでゐる。

何でも先の線路が塞つてゐるとかで、汽車は何時迄経つても動かぬ。亞米利加の汽車は、笛も吹かず、鐘も鳴らさず、時間になれば、挨拶もせず、ごんごん出て仕舞ふが、露西亞のは、停車場に着くとごわんご鐘が一つ鳴る。夫からやゝ暫くして、もう出て宜い頃になると、ごわんご二つ鳴らす。夫が鳴る迄は、勝手に汽車の中から外に出歩いても差支がない。二つ鳴つた鐘に促されて、一同車に入ると、今度はごわんごご三つ鳴つて、之と殆ど同時に、笛がひゆうと鳴つて、汽車が初めて動き出す。萬事大やうな露西亞に似合はず、之ばかりは頗る几帳面に出てゐるので、汽車が此處に留ると同時に、逸り

雄共は我一と車を下り立つた。

若いのが下りると、年の取つたのも追々下りる。はては、美智子さんも、柳子さんも鶴子さんも皆下りる。乗合せた露西亞の客も下りれば、車掌も女を連れて下りて行つた。シベリア線の急行の車掌は、イルクーツクを境として、其の間はずつと乗り續けてゐるので、食堂や停車場では始終乗客と顔を合せる。其の上、根が人附合の宜い露西亞人のこととて、丁度長い航海中の船長の様に、何時しか乗客と親しく物を言ひ交す様になつて仕舞ふ。之が莫斯科から奇麗な若い女と一所に乗つてゐたので、其の女も一同と知合になつた。シベリアの車掌は能く女を連れるものと見えて、イルクーツク以東で入れ代つた車掌の所にも、奇麗な若いのが一所に乗つてゐた。兎に角日本の車掌と比べると、地位も高からうが、様子が全く違ふ。

九時とは言つても、まだ明るい。外面が餘り賑かなので、僕も出て見た。此の邊は丁度大井の踏切附近の様に、線路の所だけ低くなつて、兩側は切立つたやうな土堤だ。見ると、

セペリアの夕月

三百八十八

一同は此の切立つた土堤へ駆け上り合ひをしてゐる。首尾よく上るのがある、途中から落ちるのがある、顛げのがある、やつと半分行つて、辛く上なる人に引張り上げて貰つてゐるのがある、其の様子が可笑しいとて笑ふもあれば、旨く上れたとて手を拍つのもある。婦人までが既に上り詰めてゐる。車草も例の女も上にある。マンテリや新兵衛君が、下から何やら難し立てゐる。僕にもやつて見ろといふから、する／＼と駆け上つたが、さて、上り詰めた上は、四顧渺として際涯を知らぬセペリアの青野原。

暮れなんとして暮れやらぬセペリアの野の夏の夕の眺——嗚呼僕が若し詩人であつたならと思つた。地には百花繚亂、紅深き芍薬、花鮮かなる白薔薇、蒲公英の黄なる、雛菊の覺束なきなど、八千草の八千色々に咲き亂れて、其の間に汽車を待つ間の手すさびとて、彼方此方に之を摘み行く人の影が、ちらりほらり見える。大空は萌黄色とばかり青すんで、折しもの満月一輪、白く東の方にかゝつてゐる。遙の回避線に横はつた移民列車の中から、聲高らかに若い女の歌ふ聲が聞えて、笑ひさゞめく聲が左ながら手にとるやうな。何

しても盡だ。

日は追々に暮れかゝるが、汽車はまだ中々出さうな気色も見えぬ。冷たい夕風がそろそろと吹いて来たので、さじも賑やかだつた一同も追々に車の中に引上げた。(六月十二日)

八、マンテリ君

道程二萬二千七百五十五哩の世界一周(二)目出たく此に終つて、僕は今京都祇園の一方の奥座敷にゐる。相對する者はクック社の嚮導主任伊太利の人エフ、マンテリ君。定めなき六月の空とて、雨か又しと／＼と降つて来た。何處の座敷で呼んだものか、女中が例の一方一流の「ハイ——イッ」と、無暗に「イ」を引張つて、最後の「イ」をべらぼうに尻上りにした、長い／＼返事が聞える。長いといへば、リパブルで初めてマ君に會つて以來、倫敦巴里から、伊太利獨逸露西亞と、一所に來た道程も随分長いものであつた。食卓を共にしたこともある、一所に散歩したこともある、酒を酌み交したこともある、シ

マンテリ君

三百八十九

マンテリ君

三百九十

ベリアの汽車では、一つ室を二人で占めて、十一日の間起臥を共にしたことをさへある。今宵又片山君の招きを受けて、此處で一所になつた。之が別と思ふと、何だか名残が惜しい。

マ君は一種不思議の男だ。生得語學の天才とでもいふものか、伊太利語は言ふ迄もないが、英佛獨共に自國語同様に話す。夫で西班牙語も知つてゐれば、露語も社中第二の露語學者たる僕（第一は無論長谷川君で、其の外に誰も知つた者はないから、僅に三四十語を心得た僕則ち第二である！）等より旨い。日本語でも直ぐ聞き覚えて、直ぐやり出す、其の又調子が頗る宜い。之が全く來たこともない不知案内のシベリアに、五十餘人を連れて廻つて、寢臺の約定から、荷物の整理から、食事の世話迄、一切萬事一人でやつて、何等の手落を生ぜしめなかつた手並は、流石にえらい。

氣の短い怒り易い男であるが、機嫌の直るのも又直だ。夏の夜嵐同様、過ぎて了へば、翌日はけろりととしてゐる。奥も底もない打破つた様な人で、僕等は露西亞以來三度も大激論をしたが、結局人の説に理ありと見れば、其の人に服して自ら改めることは電光の如く

マンテリ君

三百九十一

早い。汽車の中では、日本の扇子を使ひながら、目をばちつかせて、車掌でも、給仕でも、男でも、女でも、誰彼構はず相手にして話しかける。時々彼方此方の部屋を冷かし廻つて、下らぬ冗談に人を笑はせる。退屈した時は、寝轉んで書物をよみながら、「暑い〜」と日本語で大きな聲をするのである。夜になると、能く世界の各所を廻つた旅行談を僕に聞かせたが、之が又恐ろしい話し上手で、其の身振聲色を使ひ分けて、抑揚面白く冒險談などをやる所は、實に恍として聞き惚れる位。僕は毎晩寢際に其の物語を聴くの、汽車中唯一の楽しみとした。彼が摩洛哥のタンデールで、土人に追かけられて、命から〜逃げ出して、幸く伊太利の軍艦に助けられた時の話などは、聞いてゐて、思はず手に汗を握つた。某嬢の贈物だとして、平生側を離さぬ銀の水香がある。其の由來話から、ラツかり口を滑らして、其の某嬢とは昔て相思の中であつたが、両親の許さぬ爲に分れることになつて、其の折記念に之を貰つたのだといふ、大分えらいことを話し出したことがある。日本でそんな話をする、必ず酒を驕るものだといふと、先生早速麥酒を取つて来て、某嬢の爲に

マンテリ君
とて祝杯を上げた。其の以來若い男を見ると、色々手をかへて斯な話に釣り出して見て、誰彼なしに「ラガレ〜」と迫る。「ラガレ」は「をこれ」の間違である。危く驕らされかゝつた者も、一行中には大分あつた。

「岸勇さんあげます。」屏風の影から女中が呼ばると共に、小さな舞妓が入つて来た。

「あげます」位の日本語は心得たマンテリ君「岸勇」を「キツス、ユー」と聞き解めて、忽ち例の眼をばちつかせながら、「アコネ、キツス、ユー、チヨードイ！」と来た。「アコネ」は僕

の教へた日本語のアコネを、何時しか間違へて、人が何と言つても之で済してゐるのである。之を手初めに、マ君は頻に道化した身振をして笑はせる、其中三味が出る、舞が出る、

片山はん迄が躍り出じやはつた。

外になつかしい日本の雨の音。(六月二十二日)

半球周遊終

註 解

註解中「奮報」とあるは「世界一周奮報」「大英」とあるは「大英遊記」の時。

太平洋小品

- (一) 洋上の風雨(五) 朝日世界一周會員を載せたる汽船モンゴリア號は、三月十八日横濱を發してより二十二日迄、五日間引き續きたる風雨に遭ひたり。二十一日風雨最も甚し。(奮報)六一六四)
- (二) 杉原榮三郎(三) 東京府會議長にて一周會員。
- (三) ワイキ、(五) ホノル、にて有名なる海水浴場。此處に日本の旅館を兼ねたる料理店望月といふがあり。モンゴリア號は三月二十七日を以て布哇に寄港したるなり。(奮報)七八一八八)
- (四) 尾上新兵衛(五) 本名は久留島武彦、お伽噺の大家にて一周會員。
- (五) 田島達策君(五) 同じく一周會員、東京の人
- (六) 朝山吉之助(二) (七) 芳賀吉右衛門(二) (八) 堀米吉(二) (九) 猪飼史郎(二) (十) 勝田忠(二) 皆な一周會員

註 解

北米小景

- (一)ネバダ山(註) 一周會員は四月三日桑港に上陸し、翌日同地滞在、翌々五日午前十時桑港を發して、ソートレーキに向へり。シエラ、ネバダは五日の夜中に越えたるなり。
〔書報〕二二二—二三)
- (二)九十日の旅(註) 朝日世界一周會は九十二日を以て、世界を一周すべき豫定なりしが故に斯くいふ。
- (三)ソートレーキ(註) 一周會員は四月六日ソートレーキ着、同夜は同地に一泊したり。
〔書報〕二六—二七)
- (四)高倉藤平(註) 一周會員、大阪の人。
- (五)野村の妻君(註) 名は美智子、横濱サムライ商會主野村洋三氏の夫人。同じく一周會員なり。百五頁に其の寫真あり。
- (六)ポストン(註) 一周會員はソートレーキよりシカゴ、ナイヤガラを経て、四月十四日ポストンに着、翌日此處を出發したり。
〔書報〕二五—二六)
- (七)フキラデルフキヤ(註) 四月十六日紐育より華盛頓に至る途上、一周會員は此處に立ち寄り、二時間ばかり處に留まれり。
〔書報〕二六—二七)

- (八)ワシントンが家(註) 正音はリンカンに近し。今は俗に従ふ。
- (九)土屋大夢和尚(註) 本名は土屋元作、著者と同じく朝日新聞の特派員として、一周會員と同行したる者。和尚とは戯れにいへるのみにて、本來坊主に非ず。此の書中大夢氏の筆に成れる小品數篇を收めたり。題下に「大夢」と署名したるものは是なり。
- (一〇)クロースン老人(註) クック社員にして、一周會員の爲に布哇より倫敦迄同行したる人なり。老人に關する記事は「クロースン哲學」の項(六二頁)に就て見るべし。
- (一一)マウント、サアノン(註) 一周會員は四月十六日華盛頓に着し、同十八日マウント、サアノンを訪へるなり。
〔書報〕二七—二八)
- (一二)服部保藏(註) 一周會員、大阪の人。
- (一三)サキルメン(米國々務次官の請待)(註) 四月十八日大夢氏と著者と其の午餐に招かれたるを以て、斯く言へるなり。同氏が東京駐劄公使館書記官たりし頃より、兩人とは交友の間柄なりき。
- (一四)大久保不(註) 一周會員、水戸の鎖業家にて前代議士なり。
- (一五)外山政藏(註) 一周會員、東京の人。

大西洋即事

- (一)安樂君(まき) 紐育日米週報の主筆。
- (二)運動會(まき) 一周會員が太平洋航海中、汽船モンゴリアの甲板にて、三日間引續き船客の大運動會を催し、一周會員中之に加はりて大勝を博したるもの少からず。故に及ぶ。(「畫報」六六―七六)
- (三)井上禿三郎君(まき) 本名は井上徳三郎君、頭の禿げたるを以て、戯に斯くは名づけつ。大阪より一周會に加はりたる人にて、職業は三品仲買人。
- (四)梅原龜七君(まき) 大阪の銃砲商にて、市會議員たり。同じく一周會員の一。

後の倫敦

- (一)ロートン君(まき) ハロールド、ロートンといふ。「トリビューン」の編輯長たりし人にて、「大英遊記」の倫敦小品「トリビューンの編輯局」記者俱樂部「午前三時の朝飯」に出でたり。(「大英」九三―一〇三)
- (二)ヘビアット君(まき) トリビューンの編輯副主任、「大英遊記」の「トリビューンの編輯局」中なる左利の人とは此人のことなり。同書には名を忘れたる爲、副主任とのみ記しおけり。(「大英」九三―九六)
- (三)デピス老人(まき) レミンソンの人にて、「大英遊記」中に屢々出でたり。老人に關する記

事は、此の書中の「レムの里」「續レムの里」「續々レムの里」及其の註解に詳かなり。

- (四)去年の下宿(まき) 「大英遊記」中の「倫敦の下宿」に詳かなり。ミンクの娘、ハライス大尉、女中のベチー及落音機のことなど、皆其の中に在り。(「大英」二七六―二七八)
- (五)シエフキールド(まき) 「メール」の記者と共に「ミカド」見物の爲同地向ひたること「大英遊記」中の「ライシアム座」の項に在り。ペラミー君と會見したる記事も、亦其の中に見えたり。(「大英」一〇一―一〇三)
- (六)スタインバーグ老人(まき) 「大英遊記」中の「晚餐とシガー」の項に詳かなり。百〇八頁に「女の手を引いて」云々もあるも、同項の記事に在り。老人が飯坂の談といふも又呼子の笛の間違といふも皆同所に見えたり。(「大英」二四四―二四八)
- (七)チャンドラー(まき) 同氏のこととは、此の書中なる「レムの里」の項中に見えたり。尙同氏が夜間其の店を開きて、一周會員の買物の便宜を謀りたることは「一周畫報」に在り。(「畫報」二〇四―二〇五)
- (八)コムベア嬢(まき) 「大英遊記」中の「倫敦の下宿」に出でたる同宿の婦人。(「大英」二八四―二八五)
- (九)フキリップ夫人(まき) 右と同じ。(「大英」二八八―二九三)

註解

(一〇)後の英國議會

冠せしめたり。兩方の記事の間に何等の連絡なし。一周會員の此處を訪へるは五月の八日なり。(「叢報」三〇九—三一)

(一一)ホーニマン君 自由黨の議員として、一周會員一同を議會に案内せし時、其の委員長たりし人なり。(「叢報」三〇九—一一)

(一二)「タイムズ」社 「タイムズ」社と朝日新聞とは電報受授の關係あり。タイムズ社より發送する特電が日々朝日新聞に出づることは人の知る所の如し。「タイムズ」社と此の關係を有する新聞、世界に三あり。巴里の「マタン」、紐育の「タイムズ」、及朝日新聞なり。著者が昨年屢々「タイムズ」社に出入したる記事は「大英遊記」に在り。(「大英」四八一—五六)

(一三)「バル君」 「タイムズ」社の總取締役にて、今は社長の實權を握れる人なり。(「大英」二五七—五九)

(一四)後のサットンブレース 「メル」社長ノースクリップ男爵の別墅にて、著者は昨年之を訪へることあり。故に「後の」といふ。(「大英」三一九—二二七)

(一五)「柳子夫人」 一周會員梅原龜七君の夫人

(一六)「鶴子夫人」 一周會員堀米吉君の夫人

レム の 里

(一)レムの里(註解) レミントン(註解)をいふ。去年は二回此處を訪へることを以て、一纏めにして其の記事を草せんとする志なりしが、遂に果さず、僅に其中の記事四五を「大英遊記」中に收めたるのみ。「倫敦小品」中の「無名の投書」「汽車の乗替難」「デビス老人」「アボンの流」「ケニルウラス」「ナイチンゲール」及び「大名屋敷」中の「ストーンレン」「アベ」「ウヲリツク、カッスル」「ガイス、クリップ」等是なり。「レムの里」は成るべく此等諸篇と重複せんことを恐れて、同じやうの記事は盡く避けたり。讀者若し「大英遊記」の記事に依りて之を補ひ玉はゞ幸甚なり。(「大英」二一六、二二四、二二五—二四〇、二二七—二四七)

(二)「ストーンレレー、アベニキ」 「大英遊記」の「大名屋敷」の二「ストーンレレー、アベ」に委し(「大英遊記」二二七—二三五)

(三)レミントンの公園(註解) 「大英遊記」の「倫敦小品」中「デビス老人」の記事は之と同じ日の記事なり。(「大英」二二五)

(四)技師が家の晚餐(註解) 「大英遊記」の「倫敦小品」中「ナイチンゲール」の記事は此處に入るべき筈なり。(「大英」二三七)

註解

- (五) ウラツク城(二六五) 「大英遊記」の「大名屋敷」に委しく出でたるを以て、此處には一切の記事を省けり。(「大英」二三五―二三九)
- (六) ガイス、クワツフ(二八五) 右と同じ。(「大英」三四〇―二四七)
- (七) 鴻巣ホテル(二八五) の記事は「大英遊記」の「倫敦小品」中「アボンの流」に詳かなり。此の書の巻頭に掲げたる沙翁の碑の石摺の餘白に署名したるは、其の節不思議に此處に落ち合ひて酒酌み交したる人々なり。一番右の端なるは沙翁を埋めたるトリチニー會堂の僧トムキンスの署名にて、此の石摺の偽物に非ざるを證せんとして其の由を書き入れたるなり。此の人は無論酒の席に與からずと知るべし。其の次なるは、モリスとてホテルの女中。其の次はデケンポトといへる若き工學士。其の次はストーンレー、アベの馬丁頭グラント。之が「マツクラカン夫人の友達にして、且つ均しく蘇格蘭人」と書き添へたるは、前日アベにてマ夫人と會したる話より談蘇格蘭のことに及び、其の局蘇格蘭人に關して前の工學士と激しき論争に及びたるより、馬丁頭醉餘戯れに斯くは記しつるなり。記事「大英遊記」に委し。一番左の端なるはデビス老人の署名。今之を上梓するに當りて、斯く説明を加へ來れば、誠に昨遊を憶ふの情に堪へざるものあり。(「大英」二九一―三三)
- (八) 古城の敗墟(二九五) 「大英遊記」の「ケニルウヲース」は二度目に訪へる時の記事なり。

- (「大英」二三五―一三七)
- (九) 瀬山某君(三〇五) 「大英遊記」の「瀬山壽君」の記事に委し。(「大英」二七一―二二)
- (一〇) パーナード夫人の老(三二五) 同上(同右)
- (一一) ヒンチンブルック城(三三三) 「大英遊記」の「大名屋敷」の(五)「ヒンチンブルック城」に出でたり。(「大英」二四八―二五〇)
- (一二) 雨の田舎道(三四) 「倫敦小品」中の「汽車乗替難」と同じ時の記事、但し勉めて重複を避けたり。(「大英」二二―二四)
- (一三) ラツチウヲース自轉車製造會社(三五) の記事同じく「倫敦小品」中の「ケニルウヲース」の部に在り。

巴里半面

- (一) 片山茂三郎(三五五) 一周會員
- (二) 中村平三郎(三五五) 同
- (三) 米谷秀司(三五五) 同
- (四) 大使館の午餐會(三五五) 一周會員一同は五月十七日の正午栗野大使の案内にて、大使館にて午餐の饗を受けたり。(「遊報」三三七)

伊國鴻爪

- (一)ゼノア(三六五) 一周會員は五月十七日夕巴里を發し、翌日ゼノア着、十九日ゼノアを見物したり。(「舊報」三四〇—三四四)
- (二)マンテリ(三五四) 倫敦より日本迄一周會員に同行したるクック社の嚮導主任にて、伊太利の人。詳細は「中歐東歐」の(八)「マンテリ君」の項に在り。
- (三)カンボサントの墓場(三八五) ゼノア名所の一なる墓地にて、其の大石彫像の墓碑を以て名あり。(「舊報」三四三)
- (四)メレンダ(三八五) 巴里より莫斯科迄一周會員と同行したるクック社の嚮導なり。伊太利の人。
- (五)大使館の宴會(三九〇) 一周會員は五月二十日羅馬に着し、留まること四日。五月二十日の夕日本大使館にて龜山伊國代理大使より饗應を受けたり。(「舊報」三四四—三五三)
- (六)ボムベイ(三九五) 五月二十四日一周會員はナポリを出で、先づベスピアス火山に登り、更にボムベイの發掘せられたる跡を訪へり。著者の此の行は會員一同と共にしたるものと察せらるべし。(「舊報」三五四—三五七)
- (七)マーク、トウエインの言章(三五七) マーク、トウエインの著「イノセンツ、アブロード」より

之より以下終迄皆然り。唯大意を取つて原文に拘はらず。原文にはグラント將軍とありしを、今は分り易きやうとて東郷大將と改めたり。大將の名を假用したる無禮は謹んで謝しおく。

(八)ベニス(三五五) 一周會員は五月二十六日ベニスに着し、翌日は二十餘艘のゴンドラを仕立て一日市中を見物せり。此項に擧げたる記事は此の等團體の運動に關係なし。(「舊報」二五七—二五九)

(九)板並法學士(三五七) 大阪の人板並直三郎君、同じく一周會員なり。

中歐東歐

- (一)瑞西の山河(三六〇) 一周會員は五月二十八日伊太利ミランを發し、瑞西を通過して、獨逸フランクフルトに向へり。(「舊報」二六一—二六三)
- (二)ウエステン(三六六)の店 一周會員は五月三十日伯林に着し、六月一日迄此處に留まられり。ウエステン商店の招を請けて之を訪へるは五月三十一日のことなり。(「舊報」二六六一—二七五)
- (三)觀兵式場(三六六) 六月一日一周會員一同は折よく當日舉行されたる獨逸近衛兵の春期大觀兵式を參觀することを得たり。故に及ぶ。(「舊報」二七二—二七三)

註解

一一

- (四)仙風居士(三七二五) 露國大使館通譯官上田仙太郎君。(大英三一三三)
- (五)長谷川君(三七六五) 二葉亭四迷君のこと。著者と行違ひに露都に向へる朝日新聞露都特派員なり。
- (六)ギルチネオン君(三八二五) 大英遊記莫斯科の項に記事あり。(大英三一四一三二五)
- (七)シベリヤ(三八六五) 一周會員は六月七日の夕莫斯科を發し、シベリアを横斷して、同月十八日浦潮に着したるなり。(露報二八五―二九七)
- (八)世界一周終る(三八六五) 十九日浦潮を發し、二十一日早朝無事敦賀歸着。之にて一同全了る。此の京都の會食は翌二十二日のことなり。

明治四十二年一月二十日印刷
 明治四十二年一月廿三日發行

・定價金壹圓五十錢
 ・郵税金十二錢

著者 杉村廣太郎

發行者 田中源三郎

印刷者 神谷岩次郎

印刷所 東京印刷株式會社



發行所

東京市麹町區有樂町三丁目一番地

有

樂社

電話本局二〇九五
 振替口座三〇九五

四版

楚人冠杉村廣太郎著

大遊英記

菊版三百五十頁三色版挿畫八葉

定價壹圓貳拾錢

郵稅拾貳錢

— 本製麗美個條十五版真寫 —

本書の好評なる四版を重ねたるを以て知るべく眞價は左記諸名氏の批評によりて盡せりと謂ふべし

京都帝國大學講師内藤湖南氏曰く「我國の紀行文、此の如く長篇にして、而も此の如く面白き妙文は、明治文壇未だ有の産物なり」と。

國民新聞主筆徳富蘇峰氏其紙上に於て曰く「此れは記者の眼と文人の手とを遺憾なく發揮したる一種縦横の快心快語の好遊記なり」と又曰く「其情趣躍々として、紙外に活動す」と又曰く「筆を使ふ舌を使ふが如く、舌も猶及ばざるの極あり」と。

實業界の巨人澁澤榮一男曰く「楚人冠の大英遊記は文辭麗妙にして飄逸、叙事多面にして徹底、曾遊の経験なき者に取つても、甚深の感興を興へ、曾遊の経験ある者に取つては、更に至深至大の感興を興ふるものなり」と。

本書は今回發賣せる「半球周遊」と姉妹巻なれば彼の缺は是れ補ひ是れの缺は彼補ひ兩著併讀して始めて完全なる海外遊記となる。

○六二替振社樂有内の九京東

報知新聞所載 生駒鞠翔著

澁澤榮一評傳

一月一日發賣
菊版洋裝美本
約二百頁
男爵肖像邸宅
寫真版數個
定價壹圓廿錢
郵稅十二錢

本書は曰ふ迄もなく實業界の巨人澁澤男爵の評傳なり、實業界に於ける地位名譽共に高き男の經歷は是「明治實業史」とも曰ふべく又男の處世性行等に至りては世の模範となるべきもの多し誠に得難き良書と云ふべし。

東京丸の内有樂町

發行所 有樂社

四版

楚人冠杉村廣太郎著

大英遊記

菊版三百五十頁三色版挿畫八葉

定價壹圓貳拾錢

郵稅拾貳錢

— 本製麗美個餘十五版真寫 —

本書の好評なる四版を重ねたるを以て知るべく眞價は左記諸名氏の批評によりて盡せりと謂ふべし
 京都帝國大學講師内藤湖南氏曰く「我國の邦行文中、此の如く長篇にして、而も此の如く面白き好文は、明治文壇未の有の産物なり」と。
 國民新聞主筆徳富蘇峰氏其紙上に於て曰く「此れは記者の眼と、文人の手とを遺憾なく發揮したる、一種縱横の快心快語の好遊記なり」と又曰く「其情趣躍々として、紙外に活動す」と又曰く「筆を使ふ舌を使ふが如く、舌も猶及ばざるの概あり」と。
 實業界の巨人澁澤榮一男曰く「楚人冠の大英遊記は文辭麗妙にして飄逸、叙事多面にして徹底、會遊の経験なき者に取つても、甚深の感興を興へ、會遊の経験ある者に取つては、更に至深至大の感興を興ふるものなり」と。
 本書は今回發賣せる「半球周遊」と姉妹巻なれば彼の缺は是れ補ひ是れの缺は彼補ひ兩著併讀して始めて完全なる海外遊記となる。

○六二替振 社樂有 内の九京東

報知新聞所載 生駒鞠翔著

澁澤榮一評傳

一月一日發賣
菊版洋裝美本
約二百頁
男爵肖像邸宅
寫真版數個
定價壹圓廿錢
郵稅十二錢

本書は曰ふ迄もなく實業界の巨人澁澤男爵の評傳なり、實業界に於ける地位名譽共に高き男の經歷は是「明治實業史」とも曰ふべく又男の處世性行等に至りては世の模範となるべきもの多し誠に得難き良書と云ふべし。

東京丸の内有樂町

發行所 有樂社

邦文書類

東京朝日所載 櫻 櫻 著作 脚本	齋藤 格 著	東京朝日所載 荻野 椋十 著	和 田 世 子 著 北 澤 樂 天 著	東京朝日所載 畫傳 子 著	關 謙 之 著
殺生關白畜生塚	トラホーム豫防策	上方見物	新西洋笑府	人物畫傳	開運秘訣
定價五十錢 郵稅六十錢	定價五十五錢 郵稅六十錢	定價六十錢 郵稅六十錢	定價八錢 郵稅八錢	定價四十錢 郵稅六十錢	定價十二錢 郵稅十二錢

東京丸の内 有樂社 振替六三〇



ハカイラ版二六〇頁口繪アト二四頁
定價十六錢 郵稅六錢

大英游記著者楚人冠曰く
人間の頭脳には、愚素と云ふも
のがある、掠十は其の愚素の異
常に發達したものだと言書も
掠十の著書其の言ふ處は何處
まで愚だが知らぬが而かも當
人は大真面目だ!!!
表紙と見返しにの漫畫は流石北
澤樂天の筆で振つて居る。

發行所

有樂社

振替口座三六〇番

邦文書類

小川煙村著 現在的活動主義 定價二十五錢 郵稅四錢	根本博士 石塚軍監監述 原田玄龍 實驗 心身健康談 定價二十錢 郵稅四錢	塚越山東著 瀨戶內海 定價卅五錢 郵稅四錢	梅澤和軒著 武家時代 女學叢書 一卷、二卷、三卷 定價各三十五錢 郵稅各六錢	都新聞所載 伊原青々園著 新野崎村 定價廿五錢 郵稅四錢	東京、大阪 朝日新聞論說集 二冊共各廿五錢 郵稅各四錢
---	---	---------------------------------------	--	---	---

東京丸の内 有樂社 振替三六〇

平民科學

定價各十三錢 郵稅各四錢

第壹編 人間發生之歷史 堺利彥編	第貳編 植物之精神 山川均述	第參編 男女關係之進化 堺利彥編	第肆編 動物界之道德 山川均述	第伍編 地球之生滅 志津野又郎述	第陸編 萬物同根一族 堺利彥編
-------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	------------------------------

東京丸の内 有樂社 振替三六〇

英譯小說類

德宮蘆花著 英譯 不如歸 定價六十錢 郵稅六錢

尾崎紅葉著 英譯 金色夜叉 郵上二卷 卷六品切 稅一十錢 郵稅四錢 八十五錢

木下尚江著 英譯 良人の自白 一卷六十錢 郵稅四錢 二卷七十錢 郵稅四錢 三卷近刊

吉田井菰齋著 英譯 紀文大盡 定價五十錢 郵稅四錢

第二高等學校教授 藤田氏譯 英譯 太閤記 定價八錢 郵稅四錢

東京丸の内 有樂社 振替三六〇

英文書類

英和對譯 今上御詠集 定價卅四錢 郵稅四錢

米國ストロデ博士譯 英文詩集 日本魂 定價八錢 郵稅四錢

山口高商教授 佐々木文美著 英作文構成法 定價卅五錢 郵稅四錢

吉田俊男著 英語前置詞正用法研究書 定價四十錢 郵稅四錢

英學編纂局編輯 英界譯官職名集 定價二十錢 郵稅四錢

東京丸の内 有樂社 振替三六〇

英語叢書

錢十二各價定 錢四各稅郵

第一 如何 <small>余にして</small> 英語 <small>をやひ</small>	第二 大人物の少年時代	第三 世界奇聞	第四 <small>しや</small> 會話と對話	第五 手紙の書き方	第六 東西お伽噺
第七 英文法講話	第八 前置詞活用實例	第九 日英時事會話	第十 <small>余は如何にして</small> 米國少女 <small>を學び</small>	第十一 英米詩歌集	第十二 日本お伽噺

〇六三替振 社樂有 内の丸京東

著郎太廣村杉冠人楚

裂八花七

錢八稅郵 錢十六價定

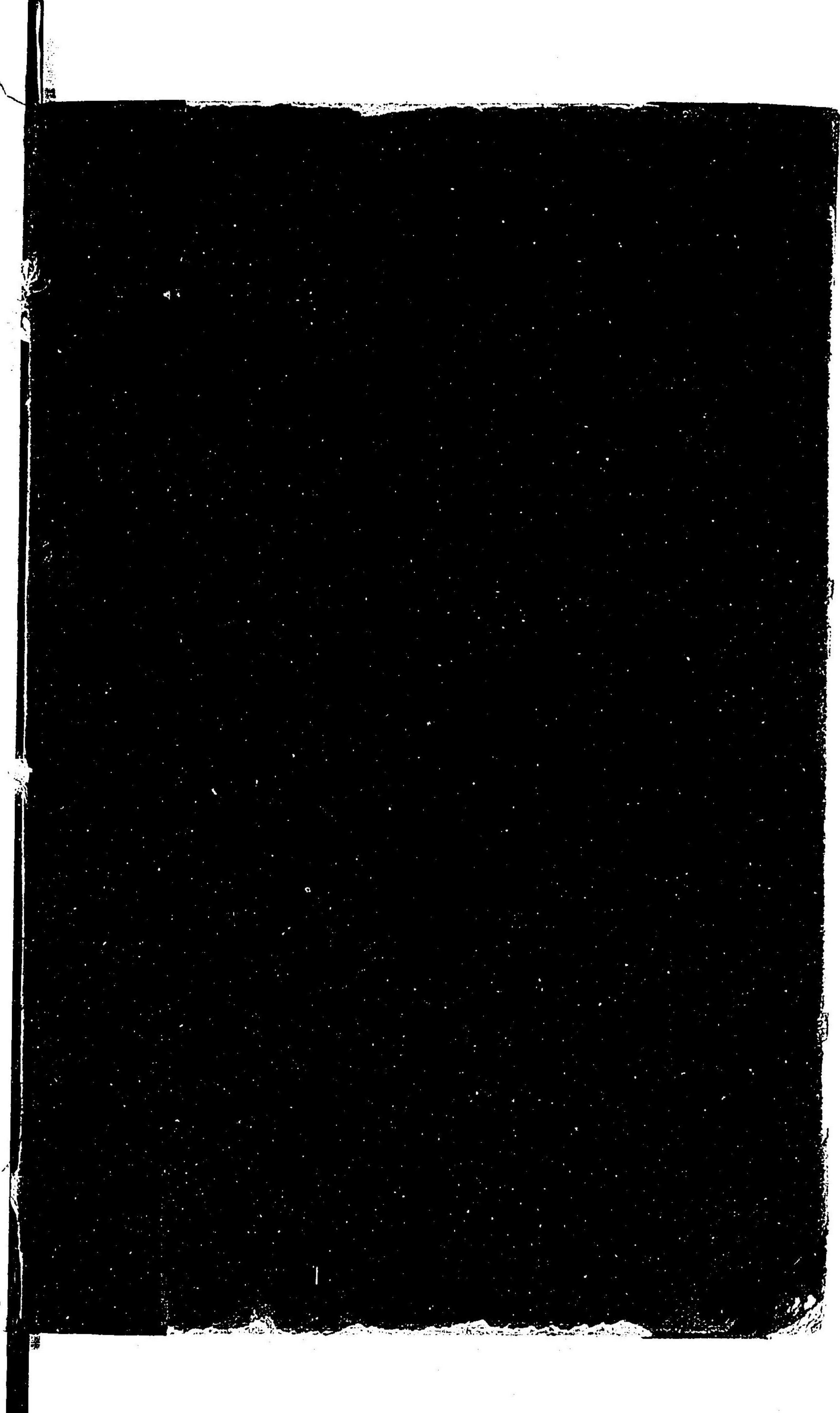
著者曰く此書は著者が名に畏れず戀に泣が半錢の債を負はず半人の寵を負ます天上天下一點半畫も他の掣肘威壓を受くることなくして縦に我が見得底を披露せる者、過去十三年間の悪文惡詩收めて此の一卷の中に在り、著者の如く貧乏し著者の如く墮落せんと欲する者は請ふ此書を讀め

地番六町原區川石小市京東

行發堂聲鷄

三五三一座口替振

04
75



64

75

022204-000-8

64-75

半球周遊

杉村 楚人冠(広太郎) / 著

M42

ADA-0640

